

シンポジウム2021

教育がつなぐ「国際協力×ZOKKEIのポテンシャル」

シンポジウム2021

教育がつなぐ「国際協力×ZOKEIのポテンシャル」

会場：東京造形大学12号館201 (公式チャンネルよりYoutubeライブ配信)

日時：2021年10月1日 13:00～15:30

【第1部】対談

渡部陽一 国際フォトジャーナリスト

小林貴史 [東京造形大学教授]

並木美奈 [東京造形大学院生]

進行：山田猛 [東京造形大学教授]

【第2部】トークセッション (エジプト、カンボジアと多元生中継)

・トークセッションスピーカー

神谷哲郎 [JICA就学前教育チーフアドバイザー / エジプト]

矢加部咲 [JHP・学校をつくる会プノンペン事務所所長 / カンボジア]

藤掛洋子 [横浜国立大学教授・博士・JICA海外協力隊事務局技術顧問]

山田猛 [東京造形大学教授・博士・国際協力研究]

・モデレーター

石賀直之 [東京造形大学教授]

もくじ

はじめに 4

【第1部】対談 11

【第2部】トークセッション 35

グラフィックレコーディング 34・64・76

はじめに

東京造形大学の教職課程は、単に教員養成としての役割に留まらず、建学の精神であるデザインや美術の創作活動を時代の精神や社会の創造に深く結び付いたものとしてとらえ、それら造形活動を広く社会的な観点から探究し、進取の気概を持って創造的に実践することとともに、教育の視点で幅広く社会とかかわっていくことを目指している。それは本学の使命である社会的問題の解決に向けて取り組むことのできる人材の育成や、造形活動を通じた文化の創造と社会の発展への貢献にも直結していると考ええる。本学で我々は、これまでの教職課程がどのような取り組みをしてきたか精査することにより、未来の造形教育を見据えた新たな活動方針を設立すべく造形教育検証プロジェクトを発足させた。プロジェクトの詳細及び検証結果は以下の通りである。

1. 造形教育検証プロジェクト設立背景

造形教育（学校教育のみならず社会教育を含めた造形教育活動）は時代とともに変化していることは自明である。そこで本学における造形教育が現状どのようなようになっていくか、その成果と今後の課題を明らかにするため、これまでの東京造形大学における教育に関連する様々な実践の整理と分析を試みることにした。過去10年における検証の視点として以下の3つを挙げて考えることとした。

- ① 大学院を含めたこれまでの教育活動における価値の再発見
- ② 社会的なニーズにどれだけ応えることができるか

卒業生教育関連進路先（2012～2019年度）

| 卒業年度 | ●学校教育 | ●その他教育機関 | ●教育関連企業 |
|--------|--|------------------------|--|
| 2012年度 | ・東京都高等学校、小学校 ・神奈川県高等学校、中学校 ・埼玉県特別支援学校 ・私立高等学校、中学・高等学校 | ・子ども美術教室 | ・玩具販売 |
| 2013年度 | ・東京都中学校、小学校 ・神奈川県中学校 ・埼玉県特別支援学校 ・千葉県中学校 ・国立大学附属小学校 ・私立小学校 | ・美術予備校 | |
| 2014年度 | ・東京都中学校 ・神奈川県高等学校、中学校 ・埼玉県中学校 ・私立小学校 ・大学職員 | ・公立児童館 ・宇宙科学館 | ・玩具制作 |
| 2015年度 | ・東京都中学校、小学校 ・群馬県高等学校 | ・美術教室 | ・キャラクター企画 |
| 2016年度 | ・東京都中学校、小学校 ・埼玉県中学校 ・千葉県高等学校 | ・学童指導員 ・保育園 | ・キャラクター企画 ・玩具販売 ・玩具製造 ・テレビ番組制作 |
| 2017年度 | ・東京都高等学校、中学校、小学校 ・神奈川県中学校 ・千葉県中学校 ・大学助手 ・大学教員 ・大学職員 | ・学童 ・塾事務企画 ・美術予備校助手 | ・番組制作 ・キャラクターデザイナー |
| 2018年度 | ・東京都中学校、小学校 ・千葉県高等学校 ・茨城県中学校 ・大学助手 ・大学教員 ・私立小学校職員 | ・アトリエ講師 ・NPO法人 | ・キャラクターデザイナー ・玩具製造 ・玩具企画開発 ・モデラー |
| 2019年度 | ・東京都高等学校、中学校、小学校 ・茨城県中学校 ・私立中学高等学校 ・大学助手 | ・学童保育指導員 ・福祉厚生員 | ・教科書出版 ・塗料開発 |

表1

③社会連携等の学外での教育活動の実際

2. 検証の結果

①大学院造形教育研究領域における研究テーマ分析

二〇一六年研究領域設置以降25件の研究テーマがあるが、学校教育に関わる研究は5件であり、学校教育以外の研究事例は玩具開発研究、造形活動を通したコミュニケーション研究、学校外美術教室研究、美術館鑑賞教育研究など20件であった。以上より大学院においては学校教育以外の研究テーマが件数も大幅に多く、内容も多岐にわたっていることが明らかになった。

②教育関係の就職先分析

卒業生における教育関係の就職先においても学校教育に留まらず多岐にわたることが明らかになった。具体的には以下の通りである「表1」。

③学外における教育に関わる実施事業分析

社会連携事業資料等を基に分類した教育に関連する本学の連携事業実績は以下の通りである。

(1) 大学コンソーシアム八王子（二〇一六年）

(2) アートラボはしもと（二〇一二年～二〇一九年）

(3) 文化庁主催芸術系教科担当教員等全国研修会（二〇一九年、二〇二〇年）

(4) JICA アートによる教育プロジェクト（二〇一八年）

※学校教育に関連する事業は芸術系教科担当教員等全国研修会

3. 今後の方針

以上の検証結果を基に以下の方針を立てた。

● 社会における多様な教育活動を目的として様々な活動機関との連携が可能なハブ機能を教職課程室に位置つける。

根拠として以下の4点が挙げられる。

根拠1 教職専任教員の専門性から見る社会連携の充実

本学の専任教員はすべて小中学校の教員経験者であるが、それぞれの専門は国際教育及び幼児教育、教育学研究といった領域であり、普通教育に限定されない独自性がある。その特徴を生かした社会連携のあり方を構築していく。

根拠2 大学院教育における社会連携の実績

造形教育研究領域設立以来、大学院修士及び博士後期課程において様々な造形教育研究分野の人材を輩出し、

その過程において多くの社会連携を行ってきた。近年では博士課程においてLGBTQと教育について制作研究をおこなった博士号の取得者がLGBTQの支援団体を協同し研究を進めた実績がある。現在、修士課程では芸術による国際教育に関する研究においてJICAと連携している。他にも障害児の在籍する幼稚園と連携し、実践研究を行っている事例もある。このように学校教育に留まらない大学院教育の充実した教育環境の拡充のためにもより多くの社会団体との連携が求められる。

根拠3 実績から見る社会連携

本学の専任教員の専門性による連携先には、小学校、中学校、幼稚園、福祉施設、インターナショナルスクール、美術館、社会施設における連携事業学童施設、幼稚園、インターナショナルスクール、アートラボはしもと、美術館教育普及、文具メーカー、国際関連でJICA、NPO、NGO等がある。このような現有の連携先は本学の造形教育発展のためにも貴重な財産であり、今後も連携を密にしていくなが必要がある。

根拠4 社会的要請

これまで造形教育に関連する事業連携案件が本学に寄せられている。これは本学の造形教育活動が社会とより密接に行われることが求められていると考えることができる。代表的な事業連携案件として二〇一九年度より始まった文化庁芸術系教科等担当教員研修会が挙げられる。ここでは小学校、中学校、高等学校の全国の教員に対し、本学専任教員が協同し様々な研修を行なっており、例年その成果を挙げている。

以上示してきた根拠より導き出されるハブ機能としての柱は次の3つになる。

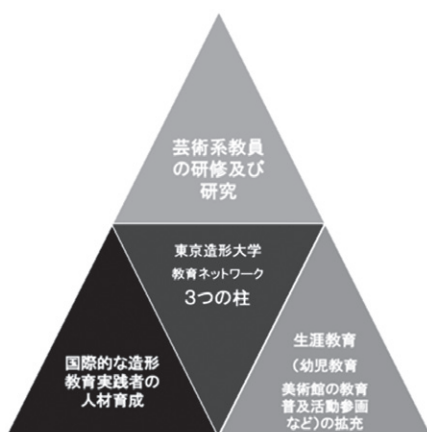


図1 造形教育ネットワーク構造図

- 芸術系教員の研修及び研究
- 幼児教育を中心とした生涯教育
- 国際的な造形教育実践者の人材育成

この柱を繋いだハブ機能を【造形教育ネットワーク】(略称：ZeN)と呼称する。

造形教育ネットワークのコンセプトを以下のように構想した。

- 「教育」をキーワードに人、社会組織をシームレスに接続し、豊かに交流する「人と活動が行き交う動的ネットワーク」の構築。

- 大学における社会的意義に基づいた教育活動の強力なサポートとしてフィジカルかつデジタルに繋がるネットワークを活用する。

- 学生、生徒、各学校種教員、地域、教育関連事業者が豊かに交流する「人と活動が行き交うネットワーク」を構築する。

以上のコンセプトをもとに、教育活動のシステムとして活用するといった水平的ネットワークと、卒業生が生涯に渡り大学と関わっていたけるような垂直的ネットワークを軸に網の目のように広がる有機的な構造づくりを目指していくこととした。

今後の活動として、運営母体を教職課程室に置き、

- (1)教職課程業務
- (2)大学院修士課程、博士後期課程における造形教育研究領域運営
- (3)造形教育ネットワーク業務の組織化を行っていくこととする。

そして、社会連携委員会、国際交流委員会との連携を図りながら二〇二〇年度より造形教育ネットワーク事業の具体的な活動及び広報をスタートしていく。

二〇二一年度は国際協力と造形教育にフォーカスし、シンポジウムを通してその可能性について考えていくこととした。

【第1部】対談

渡部陽一 [国際フォトジャーナリスト]

小林貴史 [東京造形大学教授]

並木美奈 [東京造形大学院生]

進行：山田 猛 [東京造形大学教授]



第1部

石賀 皆さんこんにちは。東京造形大学の石賀です。本日は台風も去り、緊急事態も明けての久々の土曜日にも関わらず、ご参加いただきありがとうございます。

ワクチンを無事接種された方もいらっしゃるでしょうし、早く色々なところに行きたい今日この頃ではございますが、一方で世界においてはワクチンの接種率は4%以下といったようなワクチンの世界格差が広がっている状況も国際社会の問題となっており、先進国と途上国との格差は、ワクチン以前ワクチン以後も、コロナ渦中で変わらなと思います。

さて、東京造形大学の教職課程は、単に教員免許を出すということだけではなく、幼児教育、国際協力、研究者育成等、様々な柱を基にネットワークを拡張しております。今回のこのシンポジウムもその一つになります。このような時代だからこそ、国際協力と造形の可能性を皆さんと共に考えていければと思います。本日はよろしくお願います。なお、本日は本学卒業の「教職の会」の後援をいただき開催させていただいております。ありがとうございます。それでは、シンポジウムに先立ちまして、本学の山際学長よりご挨拶させていただきます。

学長挨拶 山際康之

本日は、「シンポジウム2021教育がつなぐ『国際協力×ZOEKEIのポテンシャル』」にご出席いただき、誠

にありがとうございます。会場あるいはYouTubeを通じて、沢山の方がお集まり頂いているかと思ひます。東京造形大学を代表いたしまして御礼申し上げます。

通常でしたらシンポジウムの開催は、皆様をお招きして直接お話しさせていただく形式になろうかと思ひますが、コロナの状況もござひますので今回はリモートを通じて広く皆様に発信する形式を採らさせていただきました。そのコロナの状況ですが、この1年半半本学でも様々な対応をとって参りましたし、我々自身や社会全体にとつても生活のリズムが一変した瞬間でもあると思ひます。自分の身が本当に安全なのか、あるいは家族が安全なのか、様々な不安、日本の感染状況へのソーシャル的な対策は？……、といったここ1年半でしたけれども、気がつけば私たちはいつの間にか、視野が一人称になり内向きになっていることに驚かされます。

視野を地球規模に広げますと、ワクチン接種すらできない地域や人々がいるという現実がござひます。またそれ以前の問題として、紛争地域では今日暮らしていけるのか、明日生き延びていけるのかといった現実に直面している人々がいらつしやいます。コロナに関する恐怖や不安もござひますが、我々はそのコロナによつて埋没してしまふ、こうした現実を直視できなくなつていく、そのような怖さも秘めているのではないかと思ひます。その意味でも、今回の「世界と向き合え」というスローガンで、改めて世界で何が起こり、そして何が求められているのか、教育の視点で再認識していくことの意義は大変大きいのではないかと考えています。

第1部では世界を股に掛けてご活躍されている国際フォトジャーナリストの渡部陽一さんをお招きしてお話を伺いするというところで、どうぞよろしく願ひいたします。そして第2部では、4名の専門の先生方にご参加いただいております。その内の2名は、カンボジアあるいはエジプトからライブで参加していただくとお聞きしております。まさしく国際シンポジウムであるということですが、会場で出席されている皆様、またライブで視聴されている皆様、双方向で活発な議論で、世界そして未来に繋がる価値が見いだせることを本シンポジウムに期待



渡部陽一氏

しております。本シンポジウムの成功を祈念して、挨拶に代えさせていただきます。本日はどうぞよろしくお願い申し上げます。

石賀 ありがとうございます。それでは早速、第1部を始めさせていただきます。渡部陽一さんをお招きしての対談になります。よろしくお願い申し上げます。

山田 最初に、皆さんもすでにご存知かと思いますが、渡部陽一さんを紹介させていただきます。渡部さんは、明治学院大学の学生の当時から、戦場で写真を撮りながら取材をしていく活動を始め、その後ルワンダ、イラクなど、その他130か所というところを歩きながら、戦場での実態を伝えてこられました。これまでたくさんの本や写真集も出版されています。

最初に伺いたいのは、どうして戦場カメラマンになられたのか、そのあたりのところからお話をいただいてから対談に入りたいと思います。どうぞよろしくお願いいたします。

渡部 こんにちは、戦場カメラマンの渡部陽一です。今日はお邪魔できて光栄な思いであります。僕は今49歳なんですけれども、振り返ると戦場カメラマンになる大きなきっかけというのが、僕がまだ大学に入ったばかり20歳の時に直接僕に降りかかってきました。それは学校の一般教養、生物学という授業の中で、先生がアフリカ中央部のジャングルで暮らしている狩猟民族のムブティ族の方々の暮らしぶりや文化について具体的にお話をしてくれました。その話を聞いた当時まだ大学に入ったばかりだった僕は、先生がお話をしてくださったムブティ族の方々が本当にいらつしやるのであれば、直接お会いしてお話を伺ってみたいと思い、アルバイトで貯めてあった大切なお金でアフリカのジャングルに飛び込んでいく格安航空券を購入したのです。

いざ一人ぼっちで小型カメラを持ってそのジャングルの中に飛び込んでいくと、当時そのジャングルの一帯ではルワンダ内戦と呼ばれたツチ族、フチ族による民族衝突が起こっていて、約100万人の方々が命を奪われたジェノサイド、大量虐殺が発生しているアフリカ史上最悪と呼ばれたルワンダ内戦の真ただ中でした。たくさんの子供たちが血だらけになって泣きながら助けを求めてくる。でも、当時まだ20歳で学生であつた僕は、泣いているたくさんの子供たちを自分の手で直接助け出すことができませんでした。自分にできることってなんだろう。考えた時に浮かび上がってきたのが、子供の頃から大好きだったカメラ、写真を使えば、子供たちの状況を一つだけでも気づいてもらえることができる。そんな紛争地で写真を撮る、駆け橋となる写真を撮る仕事って何だろう。戦場のカメラマン。僕は戦場カメラマンになる。20歳の時からカメラマンの生活が始まりました。ルワンダの子供たちとの出会いが、カメラマンとしての鉄の柱が打ち込まれた瞬間でした。

山田 ありがとうございます。それでは、小林教授からお願いたします。

小林 お話にありましたように、これまで戦争という非常に厳しい中で写真を撮られてきて、本日、会場にも何点か渡部さんの写真を並べさせていただきましたが、そういう厳しい状況とともに、渡部さんの写真の中には、その土地に暮らす人々の日常と言いましょるか、日々の生活の姿も、非常に丁寧に収められているという印象を持ちました。

今回、渡部さんの著書、写真集を何冊か拝見する中で、この1冊の写真集『マザータッチ』というタイトルのタッチという言葉にとっても渡部さんが思いを込めているのではないかと感じました。このタッチという言葉の中には、例えば母親の愛情であつたり、または家族の絆であつたり、そういうものが渡部さんの思いとして込められているのではないかと思つたのです。

また、これは私の勝手な思い込みかもしれませんが、このタッチというまさに「触れる」という言葉には、

言語も違う、または文化も異なる、そしてまた社会的な状況も違う、そういう国々の土地の人々に、渡部さん自身がお会いして関わる際に、自らの持つ常識や価値観だけでコミュニケーションを求めるのではなく、お互いが触れ合うことで互いを理解し、そしてその中からコミュニケーションそのものを生成していくような、そのような姿を私は思い浮かべてしまいました。渡部さんが実際に海外でそういう人々と関わる中でのご経験から何か感じられること、またお考えなどがありましたらお聞かせいただければでしょうか。



小林貴史

渡部

僕が世界中回つていく中で、一番に大切にしている思いというのは、

リスペクトです。どの国どの地域どの民族、どの宗教に入っていくときでも、土足で踏み込まず、必ず敬意を持ってリスペクトの思いでお邪魔させていただき、生活に寄り添わせていただき、シャッターを切っていく。どの地域の人たちも混乱している場所でも、日本から来た誰も知らない日本人の一人のカメラマンをどの地域の方も迎え入れてくれました。食料が限られていても共に食べさせてくれたり、前線に入るためのルートを確保してくれたり、僕にとって世界中の方々が向き合い、力の懸け橋となってくれたことに、僕自身できることで敬意を持って向き合いたいと思っています。20歳から約29年間世界中を回り、今日の瞬間でも20歳の時に感じたいつも戦争の犠牲者である子供たちの声のかけ橋となる写真を撮るカメラマンになっていく、その初心というのは49歳の今でも全く変わることはありません。リスペクトの思いを持ち、世界中にお邪魔をさせていただくのです。

さらに戦場では一番驚いたことがあつたんです。紛争地に飛び込むと、どこもかしこも激しく戦い合い、爆撃があり、自爆テロがあり、仕掛け爆弾で街が壊されていく。でも、そんな場所であつても、戦場の最前線で一つ屋根の下、お父さんやお母さんや子供たちの日常の暮らし、それは日本で暮らしている僕たちの家族の暮らし、お父さんやお母さんが子供たちを追い、子供たちがお父さん、お母さん、家族に気持ちを重ねていく、そんな気持ちや時間の過ごし方というのは、シリアでもスーダンでも、アフガニスタンでもみんな変わらない。日本でも戦場でも日常の暮らしがそこにあることが、戦場カメラマンとして前線に入った時、戦場で一番驚き、揺さぶられたことでした。

写真を撮っている時に、僕は、激しい銃撃や最前線の激しい悲しみという状況を捉えてはいくんですけども、戦場の前線に家族の日常があることに一番衝撃を受け、カメラマンとして戦場に暮らす子供たち、家族の日常をカメラマンとして記憶に残していきたい。その写真の大切な柱が、僕の取材の中での土台にあります。そんな土台が作られてきたのは、世界中の家族との出会いというのが、取材そのものの、写真を撮る以前の全ての気持ちの一步

になっていますね。

小林 ありがとうございます。今のお話の中にも、家族そして子供という言葉が何回も出てきました。また、戦争での一番の犠牲者は子供なのだというお話を伺う中で、私が今思い浮かべたのは、長野県の上田にあります無言館という美術館のことなのです。画家になることをめざす画学生が、戦時中に若くして召集され、多くの命を落とした。その彼らのいわゆる遺作となる作品が並んでいる美術館です。そこを私が訪れた時に、実はそのような作品とともに、一つのガラスケースの中にその若い画学生が子供の時に応募した絵画のコンクールで賞をいただいた、その賞状が並んでいたのです。その賞状を見ていきますと、その後ろの方にコンクールの審査員の方たちの名前が書かれていまして、その中の一人に山本鼎という名前があつたんです。ご存知の方も多いかと思いますが、山本さんというのは当時、いわゆる明治から始まった日本の図画教育がいわゆる臨画教育と呼ばれるお手本をそっくりに写すことが目的だった中で、子供が感じたこと、見たことを素直に表現する自由画というものを自由画教育運動として進めた方です。つまり、多分その子供はその自由画教育の薫陶を受けながら、絵を描くことへの喜びを感じ、表現することを自分の将来として見据え、絵描きになることを目指していたのでしょう。そんな若い人が戦地に行つて命を落としてしまった。それを見て非常に切なく感じたことを思い起こしました。

それからまた一方、同じ展示の中には、最前線というお話が先ほどありましたが、当時戦地に送られた兵士たちが日本の家族に向けて書いた絵はがきが展示されていました。その中の彼らが描いた絵を見ますと、そういう非常に厳しい状況において絵を描くということに対してとても純粋に向き合う姿、また誤解を恐れず申し上げますと、絵を描くことに対しての喜びみたいなものが感じられたということが、自分の素直な感想としてありました。

そこで渡部さんにお伺いしたいことは、渡部さんの目からご覧になって、実際に渡部さんの訪れた国や土地のそ

という厳しい状況の中で、それぞれの土地の人々や兵士としてそこに向かっている人たちが、何かを描いたり表現したりするような姿を見かけたことがあるのか、またそこで何かを感じられたことがあったならば、お話しいただけますか。

渡部 世界中回ってみると、国や民族や宗教や地域問わず、その地域に根付いたデザインであったり、暮らしよりそこから出てくる、例えば絵画のシルエットや色の使い方、シルクロードに沿ったそれぞれに広がっていく芸術の作り方であったり、考え方、様々な生活に根づいたものづくりや美しさというものが、世界中どの土地にもありました。

ただ、戦争という一つの入り口から見えていくと、忘れられない一つの体験があるんです。それは二〇〇三年、中東のイラクで3月にイラク戦争が勃発しました。アメリカの当時のブッシュ大統領とイラクのサダムフセイン大統領が激突したイラク戦争。あの戦争が起こる直前、世界中の国が開戦すべきではない、いや大量破壊兵器があるから疑惑として攻撃を宣戦しなければならぬと様々な外交に衝突があつたんです。

でも、その時、戦争が起こる二〇〇三年の約数ヶ月前の二〇〇二年に、イラクの首都バグダッドで世界の芸術家、アーティストを集めたイラクのバグダッドの国際芸術祭が開催されたんです。その芸術祭の開催の意図というのは、芸術やアート、さらには美しさや物事を考えていく想像力、そうした民族や宗教の価値観が違うボーダーというもの、それを抜きにして、イラクの戦争が起こるかもしれないという場所で、あえて国際芸術祭を開くことによって、戦争というものを本当に止めることができるのではないか。逆に起こったとしても、それをしっかりと見届ける、逆に回避させる手段という選択肢を世界に発信する芸術祭に世界中から集まってきた時に、その会場というものはやはり、全くジャンルの違う芸術作品が集い、作品だけではなく街中で何かパフォーマンスであったり、音楽であつた

り、芸術が持つ力というよりも芸術でつなげていく世界中の気づき、創造力が、戦争というもののひとつと温度を下げることができるというアクションがバグダッドであつたんです。

そのうねりを世界配信、様々なメディアが伝え、様々な芸術家が立ち合い、戦争というものの一歩手前の引き出しの回避の選択肢というものを世界に発信した力というのは、開戦カウントダウン72時間に入りどちらに振れるのかという時に、その芸術の力というのは、メディアの力という芸術の入り口から引き戻す揺れ幅を世界に発信したんです。現実的には開戦になつてしまつたんですけど、あの芸術祭というものは世界がジャンルを問わず、芸術、ものをつくる、考える、想像をつなげる、寄り添つていく、このつながりが本当にできるんだ、本当にあるんだということを目の当たりにした開戦直前のイラクの現実というものは、様々な戦争の中で、ここから入っていけるという一つのゲート、入り口を見た感じがカメラマンとしてありました。もちろん作品を提出するだけではなく、提出した後に世界中のアーティストがそこで触れ合つたり、話したり、持っているものを見せ合つたり、家族のことを話したり、そのままその国に行つてみたり、うねりというものがバグダッドから広がつていった。

僕はいろんな考え方はあると思うんですけども、自分がこれが好き、やつてみたかった、こういったアートの道、作る道、写真の道というものが自分の中であるのであれば、僕はどんどんやってみようということが、世界と繋がつていく大きな一歩であると感じています。戦争直前のイラク、たくさんの方が犠牲になつたんですけど、その開戦直前には世界中の芸術家、ものづくり、考えている方々がアクションを起こしていた。メッセージは世界に届いていたということを、僕はカメラマンとして現場にいて信じました。

小林 ありがとうございます。

芸術の力、そして写真の力ということで、並木さん、どうでしょうか。写真というものを自分の表現としてこれ

まで学ばれてきて、もし何かお話を伺いたいことがあればお願いします。

並木 私自身は、写真専攻で写真を自分の表現媒体として使ってきましたが、現在は写真を鑑賞するワークショップを行ったりして研究をしています。渡部さんは、子供たちにカメラを持たせたことがあるのかどうか、また持たせたことがあるのであれば、どんな反応をしたんだろうということがとても気になるんですが、そのような経験はございますか。

渡部 はい、カメラマンとして自らがシャッターを切るだけではなく、実はイラクの戦争のとき、その地域で避難された方々、子どもたちにあの小型の携帯型のカメラ、当時はまだフィルムだったんですけれども、可愛いフィルムカメラを渡して自由に撮ってください、自由に撮ってきていいよっていうことで、あの「写ルンです」なんですけれども、それぞれの子供たちに渡したんです。実際に数日たって子供たちが戻ってきてそのフィルムを現像してみると、写真にはやはりその子供たちの暮らしの部分がよく写っているんですが、一番印象に残った1枚というのは、上がってきた写真がほぼ真つ暗なんです。上がってきて、ほぼ真つ暗で、何かメッセージがあるのかよく見ていくと、ほぼ真つ暗なんです。どうしてその子供にこの写真を撮られたのかということを知ると、電気がなくて、日常でシャッターを切ると、これだつていうんですね。戦争によってライフラインが壊され、こまめにシャッター切っていくと、その中の1枚が暗闇。でも、それは紛争地に立たされたたくさんの家族の空間の日常の1コマは暗闇ということとその小さなお子さんが言ってきたんですね。

美しく撮る、構成を考える、ストーリーで組み立てる、いろんな写真の魅力があるんですけれども、やはり自由に撮ってみる、何か記念に撮るではなく、子供たちに写真を撮ってもらうというのは、もしかすると大切な記録と

してもあり、子供たちにとってはエンターテインメントの極地、自由に撮っていいシャッター切り放題ということ、それこそ足撮ったり、壁撮ったりでも、それが子供たちが持っている日常の切り口、掬い取れる一つの繋がり、ドラマという印象をそのとき僕は感じました。カメラマンもそれぞれの方も今一人一人がカメラマン。毎日何十枚、何百枚も撮れる。でも、そのシャッターを切れば切るほどこういうふうには撮れる。こんな風に撮ってみたいかもしれない。このラーメン撮る時、こつちから撮るんじゃない、こつちから撮ったら入り口の方が見えて、面白かもしれない。やっぱりシャッターは切れば切るほど考えたり、感じたり気づく。これを気づく感覚が子供たちの楽しみであり、一歩広がっていく冒険、そんな思い、僕は感じましたね。どんどんどんどんシャッターを子供たちに切ってほしいと感じますね。

並木 ありがとうございます。そうですね、私もカメラを持ったとき、多分そんな感覚だったのだろうなって今のお話を聞いていて思いました。ドラマを生むつてすごく素敵な言葉ですし、その写真を切り取っていく、場を切り取っていくドラマっていうものをすごく深く考えさせられます。

小林 今、感覚というお話がありました、渡部さんの著者の中にはガイドさんのお話が出てきます。ガイドの役割というのは、多分、戦場に浅田さんが行かれた時には本当に自分の命を預けるような存在だったと思います。一般には、何か自分が知らないことを教えてくれたり、どこかに連れて行ってくれたり、そういうことがガイドの役割かと思ってしまうのですが、渡部さんは渡部さん自身の感覚を鋭く研ぎ澄ましてくるのがガイドの役割だと書かれていました。私は、読んでいてハッと感じたのですが、そのことについてもう少し詳しくお話したいだけですか。

渡部 わかりました。国際報道に関わっていく記者の方やジャーナリストの方、そして戦争報道のカメラマンである僕も、実は取材の時には一人ぼっちで戦場に飛び込み写真を撮ることは、実は絶対にしません。必ず取材をする国、例えばイラクであればそのイラクの特に取材する地域、例えば自衛隊が派遣された中南部サマアを取材する時には、その地域で生まれ育ったガイドさん、その国のアラビア語を話すだけではなくサマアならではのアクセントを使いこなせる通訳の方、そして方が何か事件に巻き込まれそうになった時に身を守ってくれるセキュリティの方。実は戦争報道の取材の現場というものは、僕を含めて最低4人で取材チームを組み立ててから初めて前線を動き、写真を撮ることができます。

例えば、僕が取材をしている時、ガイドさんが「渡部さん、この道から向こうの街へは入ってはいけません」と言ったならば、僕はなんとその場に何十回と来て取材をしても、必ずガイドさんの言葉に従います。取材を欲張らない、引く勇気を持つこと。実はその国その地域で生まれ育った方々は外国人である僕が感じ取ることができない危険が動き始めていること、例えばアラビア語表記の乗用車のナンバーがバグダッドのナンバーではないファルージャという激戦地域のナンバーの車が突然目の前を走り始めたり、歩いている人の服装が違ったり、歩いている人たちが日常の歩くスピードとは違ったり、アクセントの違う方々が極端に近づいてきているなど日本人の僕がわからない感覚でその地域の方がキャッチした時、必ずガイドさんや通訳の方の「渡部さん一回ここを離れましょう。写真撮る、撮らない以前に一度ここを離れましょう」という言葉に従うこと、これが戦場報道で怪我をせずに日本に帰ることができる危機管理の初めの一歩の大切な入り口です。

ガイドさんとどのように知り合っていくのか、突然出会った方がガイドさんになるのか。実はガイドさんと出会い、そしてガイドさんと過ごしていくという時間は、ものすごく取材を支えていく大切な入り口なんです。僕はた

くさんの方と出会って、この方は素晴らしいリスペクトの精神を持っていて、その地域ならではの文化を守りながら非常に広い柔らかさを持っている、思いやりがある方だと思ったとき、もしガイドさんとして一緒に動いてほしいと思った時にはその方のご自宅にお邪魔させていただき、お話をしながら生活をしばらく共にさせていただくことが、取材が始まる前の大切な時間なんです。生活を共にさせていただくと、諸外国の方は、外国の方でも同じ国籍の方でも気軽に家にウェルカムして生活を共有させていただく文化が色濃くあり、イラクでもレバノンでも、パレスチナでも、スーダンでもお邪魔させていただいたとき、そのガイドさんとして寄り添って欲しい方が、暮らしの中でお父さんとかおじいちゃん、兄弟、子供たち、お母さんにどんな振る舞いをしているのか、生活をしていると見えてくるというよりも、諸外国の方々、お客さんや外国の方がいてもすごいオープンマインドでそのまま素の生活をどんどん出してくるんですね。怒ったり泣いたり笑ったり、その素の状況を見ていくと、すごくリスペクトや冷静さや、地元のルールであつたり宗教観であつたりを守っている、そういった感覚が生活しているとよく入ってくるんですね。

その暮らしから、もちろん、危険なことは一切しない、前線で無理はさせない、前線その場ではなく一歩引いた取材の中で、ガイドさんとしてこの地域だけでもお願いできないでしょうかということ、ガイドさんやお父さんやおじいちゃん、極端に言えば、村長さんに許可をいただいて、そこから取材の土台を何日も、何週間も、それこそ何ヶ月も何回も行き、組み立てて、その地域に行くときには必ずその人をガイドさんをお願いする家族のような繋がり、この信頼感ができたときに、取材でゴースサインが出ます。

でも、ガイドさんの段取りでチームが組み立てられなかったときには取材そのものは入らず、一度リセットしてばらし、一回出国してもう一回組み直して、もう一度入り、ガイドさんチームができない限りは取材には入らないんです。そのまま外国人で入っていくと、すぐに足跡が残り事件に巻き込まれてしまう。ガイドさんが取材を支え



第一部 対談風景

ていく大切な全てのライフラインと言っても決して大袈裟ではない入り口です。

小林 お話を伺えば伺うほど戦地での様々な状況っていうものが頭の中に思い浮かぶようですが、またそれと同時に、逆に私たちの今暮らしていく日常生活を振り返り、考えさせられるお話かと思っております。

戦地での活動とともに、渡部さんが取り組まれていることの中には東北の方々のものづくりに関わるお仕事の様子を映像に収められてる活動がありますが、なぜまた戦地とは違ったそういう日常的なものづくりに取り組まれている方たちに目を向けようと思われたのか、お話しいただけますか。

渡部 僕は東北地方との繋がりが深く、世界と繋がるのと同じ土俵で繋がっています。二〇一一年3月11日午後2時46分、東日本大震災が発生しました。そこから東北地域に頻繁に足を向けるようになりました。足を向ければ向けるほど、震災による悲しみが起きた時、もちろん様々なメディア、情報発信、つながり、いろいろな声が上がってきたのですが、二〇

一一年から約10年が過ぎ、徐々に東北の声や震災の定期的な報道以外の暮らしの状況というものがなかなか繋がってこない感覚、普段のそれが日常というものになってきているんです。

けれども、東北に何度も何度も足を運び、時間を共にさせていた দিয়ে、よく耳にしたことは、沿岸部の方々も、内陸部の方々もやっぱり自分たちでやっていくという声もたくさん耳にしたんです。もちろん、支援であったり、つながり、友達、たくさんの方々とのつながりは大切なつながりではあるんですけど、最後の一步、一日一日地に足をつけて暮らしていく生活の基盤というものは、自分たちのその土地、近所、友達、そして家族や子供たち、お父さん、お母さんやおじいちゃん、自分たちでやっていく。その暮らしの土台でよく見えてきたのがものづくりなんです。ものづくりというと、もちろんクラフト的なものづくりというものもあるんですけど、例えば漁師さんが漁をしやすいための網や仕掛けの作り方であったり、さらには船が入りやすい潮の流れに適した海に對峙した船の作り方であったり、もちろん歴史に根づいた寺院や神社、そういったものづくりの感覚がある。

そして、僕がカメラで追いかけた山形県でやはりものづくりとして衝撃を受けたのは日本酒。酒蔵が自然に對峙し、まず水、土地、土、そして気候に向き合い、米を作り、その米をあげて、麴から日本酒を作っていく。小さな酒蔵の姿勢、杜氏の方々の思いというものは、もちろん日本酒というものならではのですね、これこそ作っていく自然に對峙した一念、一年向き合った、暮らしに根づいた、作っていくまさに熱を持った向き合い方だと感じたんです。日本酒であったり、絨毯であったり、さらには陶器であったり、様々なものづくりという姿勢はその地域の方々が雪国だからこそ、地形だからこそ、土地だからこそ、そこだからこそできることがあるということを大切につなげていく。そして、さらに一番何度も足を向けて驚いたことは、年配の職人のプロが作るだけではなく、若い人たちがあがってきている。引き継ぎとして爆発的に増えてなくても、若い人がそこにたくさん根づき、家族と暮らし、次の架け橋になっていた。山形の方、岩手の方だけではなくものづくりのために移住して、生活をそこ



並木美奈 大学院生

に根を張った若い人たちがたくさんいたんです。そんな暮らしの慣習、文化、その地域の方々の優しさ、迎えてくれる思い、そんな東北の熱というものに僕は、ものづくりの中から、やはり震災からなんですけど、強く胸をゾクゾク揺さぶられましたね。

小林 若い方たちのものづくりに対する熱ということは、本学でもデザイン、美術という表現することに対しては非常に熱い思いを持った学生たちが日々学んでいるのですが、その一員として並木さんから何かありますか。

並木 そうですね。社会とのかかわりというのはこの大学の一つの柱にはなっているのですが、社会というよりも自分を表現するっていうことに目を向けがちになっちゃって、うまくそこに踏み込めない学生もたくさんいると思うんです。自分もその一人であつたのですが、自分ではなく社会に目を向けるための一歩として、渡部さんが持っている信念であつたり、柱であつたりするものを聞かせていただけないでしょうか。

渡部 僕はカメラマンとして世界中を回ってきた。でも、元々はカメラマンではなく、バックパッカーとして狩猟民族であるムブティ族の方々に会いに行つたことで、ルワンダ内戦という現実と背景を知るきっかけから、カメラマンの一歩を踏み出しました。僕は、社会が世界に繋がっていく一つの入口としての僕からのメッセージとして、皆さんにお届けしたいという言葉があるんです。それは今、コロナでなかなか自由に動くことができないんですけど、これから、ワクチンや治癒薬ができて世界がオープンになって自由に回れるようになったとき、僕はぜひ学



渡部陽一氏

生の皆さんにメッセージを送りたいというそのメッセージは「さあ、旅に出よう」です。

「旅に出よう」それは世界を回ったり、日本国内の温泉に行ったり、グルメに行ったり、いろんな旅があるんですけど、ずばり旅に出るというのは、自分がこれが好き、ほんとはこれをやってみたかった、実はこれに引きつけられているというやりたいことを素直にどんどんやってみようということが、「さあ、旅に出よう」という心です。やりたいことをやっていくと、やっぱり好きなので疲れない。そして、コツコツ、コツコツ続けていくと、徐々に力がたまってきた大きなスイッチ、起爆剤になる。自分がこれやってみたかったということを、もう素直にどんどん一歩踏み込んでいく。さあ、旅に出ようという姿勢が、仮に時間がかかったとしても社会や世界とつながっていく大切な一歩になると僕は感じています。49歳になった今でも僕はどんどん旅に出たいと思っています。

並木 ありがとうございます。私も、ちよつとこの情勢が落ち着いたら、海外等に行ってみようかなと思います。

山田 本学は美大ですので、美大生に対するアートの切り口からの大変素晴らしいお話を伺っているのですが、こちらにある渡部さんの作品を拝見していくと、やはり先ほどから人々の普通の暮らし、特に子供たちへのまなざしというものをすごく感じます。また、その子供たちの目から何かを嗅ぎ取ろうというか、そこから何かを見取ろうとするような意思を感じるのですが、その辺りはやはり何かあるのでしょうか。

渡部 はい、戦場の犠牲者はいつも子供たちです。この現状がカメラマンとして日々取材の柱になります。日本の子供たち。例えば元気がないであつたり、どうしよう、手探りで苦しんでしまうという思いが色々上がつてくるんですけれど、カメラマンとして日本中のたくさんの子供たちのところにカメラを持って回つてみると、イラクの子供たちも、アメリカの子供たちも、バンコク、タイの子供たちも、日本の子供たちも変わらない。みんなパワーがあつて、やりたいことがあつて、友達の時間や近所のことや、もちろん勉強の不安のこと、みんな感じてることや踏み出していく環境、力というものは変わらないというのが、僕は日本人のカメラマンとして世界を回り、日本に帰ってきた時の強い思いです。

そして、子供たちを撮影していく時にやはり強く感じたこと、それは紛争地であつたり、情勢が不安定な国々というのは、食料が手に入りません。病気や怪我をしても、治療のための薬がありません。冬になって雪が降り積もつても、毛布がありません。そんな、全てが奪われたり、不安定な状況で、子供たちが暮らしていく。生き延びていく最後の力。それはどんな時でも、家族、友達、いつもみんな一緒に必ず友人や家族や親族が近くにいることで限られたものを分け合つたり、限られた薬をより小さな幼子に渡していく。日本人として、家族の暮らし、常に優しく、温かく大切にしていきたいと思つてゐる。でも、外国で不安定な地域の家族というのは、日本人から見るとびつくりするほど家族との関係が密で、いつもみんな近くにいたり、一日40回ぐらい電話したり、常にもうみんながいつも一緒に繋がつていく。この繋がつてゐる力というものが、何もなくても分け合つて生き延びていく。この力に、生きてゐる子供たちの表情が、今こうして並べられた1枚1枚の厳しくも不安定で、戦場でもそこに立つてゐる子どもたちの表情を、暮らしができる限り分かるような背景を写真の中に組み込みながら撮つてきた1枚1枚の写真です。

山田 子供たちにカメラを向ける、その瞬間の子供たちっていうのはどんな感じなのか。

渡部 子供たちの写真を撮る。でも写真を撮る時、こんにちは日本から来た渡部陽一です、ガシャッ！ ということは絶対にしません。そこにまずお邪魔させていただき、カメラはもう置いておいて、同じ時間をずつと過ごさせていただき、そこからお互いの気持ちや声や思いというものが重なってきたと思ったとき、写真を撮っていいですかという許可をいただいてから、シャッターを切り始めます。そして、子供たちが寄ってきてくれるときも、写真を撮れる時もあるんですけど、僕が一番よく写真を撮る一つの切り口は、お話をしながら写真を撮ります。もちろん、ファインダーを狙って構図を考えながら写真は撮っていくんですけど、レンズの広がりとかファインダーの構図の取り方がずつと撮っていると体に沁みしてくるので、極端に言うとかファインダーを覗かなくても上がってくる構図の状況が分かってくる。その構図で狙いながら会話を普通にしながら、その構図でとらえたと思った時に、子どもたちにカメラをできる限り意識させない状況でシャッターを切るように心がけています。あまりにも大きな一眼レフで撮ると、何か狙われているようで子供たちがびつくりしてしまうので、それこそ小型カメラであったり、携帯電話でリラックスしながら撮ったり、その中で一瞬を狙っていく。自分が得意としている構図、自分が好きと思っている狙いの感覚をシャッターとしている。

僕自身は暮らしの中で遊んだり、会話をしたり歌ったり、そんな日常の中で撮っていくという撮り方が戦場報道の前線の暮らしの中での撮り方の入口になります。カメラを消しておく。これが僕の一つの手法ですね。

山田 ありがとうございます。並木さん、カメラに関して何か質問がありますか。

並木 子供にカメラを向けると、どうしてももう構えてしまつてびつくりしたり、普段出てこない表情が出てきてしまつたりして、これじゃなかつたみたいなのは私も何回もあるので、とても勉強になるお話でした。

山田 まだまだ伺いたいことがいっぱいあるのですけれども、戦場に多く行かれています中で、具体的にそのアート、戦場におけるアートについて、もしくは表現活動みたいなものというのはどうでしょうか。

渡部 戦場におけるアート。ものをつくる、戦場のアートとは、ずばり暮らしです。その土地で生きていく、暮らしていく、あるもので生きる、限られたもので暮らしを整えていく。そこには例えばアフリカのジャングルであれば、バナナの葉っぱ一つを裂いたものを使って作ることができるもの。それを料理に使ったり、仕掛けの罠に使ったり、その罠で上がってきた例えば魚の骨を使ってさらにアクセサリーを作ったり、針を作ったり、暮らしの中かに使われてきたもの。それこそ人間の世界ではないですけれども、使うことによつて、美しさが広がってくる、保たれてくる。日本で見たことがないジャングルの色扱いであったり、日本からジャングルに入ったときの家の建て方の建造物の建築手法であったり、色使いであったり、木材の組み方であったり、考えもしなかった、それがその川べりの暮らしだからこそ、そうせざるを得ない暮らしだからこそ、広がり、伝えられ、ある面、生活が熟成されてきた表情だと思います。

戦場の紛争地は砂漠地帯の国の取材が多く、砂漠の民がたくさんその地域で暮らしているのです。それこそ、旧約聖書や新約聖書の時代から生きてきたアラビアの文化が砂漠には残っていて、ラクダに被せていくお祭りのもの、そして砂漠の谷が持っている剣の鞘のデザイン。それというのはアラビアのロレンスや、それこそ千夜一夜物語の

あの時代の暮らしの星や月のデザインがはつきりと残されている。全ての歴史その生き様というものが、生きてきた証というものが、戦場のアートとして第三国から見るとなんて神々しくてハッとさせられる。もうそれは人が生きてきた歴史や生きざまであるので、理屈抜きで本能的に吸い込まれていく美しさ、凄み、深み、色使い。これがイラクや、それこそシリア、レバノンのアラビアの民の砂漠の民の美しさ、生きたからこそ、そのものがアートでしたね。

山田 ありがとうございます。まだまだお話を伺いたいのですが後半もございますので、この後5分休憩して、グラフィックレコーディング（註1）をご覧いただくことになります。それでは第1部終了させていただきます。皆さん本当にありがとうございます。

註1 グラフィックレコーディング（以下64頁、76頁も同様）…人々の対話や議論の内容を聞き分け整理しながら、リアルタイムでグラフィックに変換し、可視化すること。対話や議論の場に出向き、耳からの聴覚情報をメインにグラフィックを作り上げていく。話の文脈や事実関係をロジカルに解釈して整理したり、専門用語の意味や複雑な仕組みをグラフィックでわかりやすくしていくこと。（参考：清水淳子「Graphic Recorder―議論を可視化するグラフィックレコーディングの教科書」二〇一七、BNN出版）

【第2部】 トークセッション

＜エジプト、カンボジアと多元生中継＞

トークセッションスピーカー

神谷哲郎 [JICA 就学前教育チーフアドバイザー／エジプト]

矢加部 咲 [JHP・学校をつくる会プノンペン事務所所長／カンボジア]

藤掛洋子 [横浜国立大学教授・博士・JICA海外協力隊事務局技術顧問]

山田 猛 [東京造形大学教授・博士・国際協力研究]

モデレーター

石賀直之 [東京造形大学教授]



第2部

石賀 お待たせ致しました。カンボジアとエジプトを繋いでいるということで少しお時間を頂きました。それでは第2部を始めたいと思います。第2部はトークセッションという形で、ここにいらつしやるゲストの皆さんと共に進めていきたいと思っています。

まず、はじめにご紹介するのは藤掛洋子さんです。藤掛さんは現在横浜国立大学教授、大学院都市イノベーション研究院教授であり、お茶の水女子大学で博士を取得されています。青年海外協力隊でパラグアイに行かれ、現在JICAの青年海外協力隊事務局技術顧問をされています。この度は、*News week* 誌が選ぶ「世界が尊敬する100人の日本人」に選出されたということで、おめでとうございます。

藤掛 ありがとうございます。

石賀 調べさせて頂いたところ、猪子寿之氏、志村けん氏、安藤忠雄氏、大谷翔平氏といった蒼々たるメンバーと共に入られていて本当に素晴らしいですね。その辺りのことも是非お話いただければと思います。

藤掛 よろしくお願いたします。



藤掛洋子氏

しょうか。

矢加部 今、8年目になります。

石賀 長期に渡り活動されているということで、また現地の様子なども伺いさせていただければと存じます。そしてもうひと方、エジプトからリモート参加の神谷哲郎さんです。現在はJICA技術協力…エジプトにおける就学前教育・保育の質向上プロジェクトチーフアドバイザーをされています。過去に青年海外協力隊としてヨルダン派遣、国連開発計画ガザ事務所に赴任されたということですが、これはオスロ合意後ということでしょうか。

石賀 そして、次にカンボジアからリモートでご参加いただいている矢加部咲さんです。よろしく願いいたします。

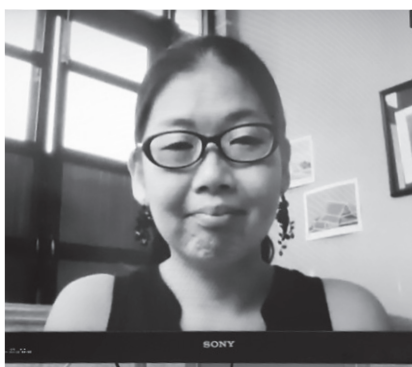
矢加部 よろしく願いいたします。

石賀 矢加部さんは大阪芸術大学写真学科を卒業された後に、公立美術館に嘱託職員として勤務され、青年海外協力隊に参加され東ティモールで活動されました。その後、現在はNPO法人「学校をつくる会」のカンボジア所長として活動されています。カンボジアで暮らされて何年になるので

神谷 はい、オスロ合意後に2年間、ガザに行っていました。

石賀 その辺りの話も後ほど何えればと思います。神谷さんはJICA本部勤務を経て、エジプト、フィリピン、イラク、パレスチナでコミュニティー開発、先ほどの話に通じるようなさまざまな紛争地域で活動されています。さらに、相模原市の橋本で子育て支援を担う社会企業「ペパーソニンターナショナル(株)」という学童施設を経営されていることです。また後ほどよろしく願います。

神谷 お願いいたします。



矢加部咲氏

石賀 そして最後に、山田猛本学教授です。国際協力における美術教育に関しては日本で唯一の博士号をお持ちということで、そちらの専門的な話もお聞きしたいと思いますのでよろしく願います。

山田 よろしく願います。

石賀 それではまず初めに、カンボジアの様子をお聞きしたいのですが、簡単な説明をしていただけますでしょうか？

矢加部 よろしく願います。(動画上映及び解説)

ここカンボジアはベトナムに隣接しています。アンコールワットが有名かと思います。これは王宮ですね、王様がいます。田舎に行くところのようなのかな風景が広がっています。宗教は仏教がメインでこのような民族衣装で儀式が行なわれたりします。舞台美術が盛んなのでこのようなかたちの伝統芸術が残っています。

あとは遺跡関係だったりとか仏教絵画、工芸、現代アートのギャラリー等があつたりします。教育支援をしているのでカンボジアの学校の様子なども見てもらえると思います。現在行われている美術の授業の様子です。

石賀 ありがとうございます。最後の方に映つたのは、よく行かれていた学校ということでしょうか？

矢加部 はい、そうなります。友人からいただいた写真も一部ございます。一枚目に映つたものは、活動地の他に、ある学校で三階建てのビルの学校で、次に映つたものはバルコニーが木造で、きちんと補修されていないものもあつたりします。いろいろですね。

石賀 ありがとうございます。また後でお話をお聞かせいただければと思います。

それでは神谷さん。続いて現在のエジプトの様子についてご案内よろしく願います。

神谷（動画内の解説音声）みなさん、こんにちは。エジプトから報告します、神谷です。現場からの臨場感をということでしたので、日本から時差7時間、約1万キロ離れたカイロから皆さんにお届けします。9月26日朝9時ごろで、通勤しているところです。ちょっと外を見てみましょう。

経済発展と個人の権利を考えさせられる、急ピッチで進められる高速道路建設の現場です。住民にある程度の保



神谷哲郎氏

証金は支払われるということですが、住民の許可を得ないで違法建築している所も見られるところも多いという事ですけれども、人口1500万人とも言われる大カイル圏、電網もないということでの車依存、そんな中で郊外に続々と新しくできる首都カイル中心部をつなぐ高速道路の建設ラッシュです。

このように教会があるんですね。この教会も多分壊されるのかな、かなり立ち退きが必要なのではないかと思われれます。壊されずに残った部分と高速道路が本当に近いですね。

ここはアフリカ大陸を流れるナイル川です。私が配属されている社会連帯省はこの道の先になります。突然ですが、ナイル川でバルータという小舟の上に乗っています。では、今日はよろしくお願いします。

石賀 神谷さん、ありがとうございます。厳しい現実ですが、ナイル川の優雅な映像も素敵ですね。また後で話いただければと思います。本日はよろしくお願いいたします。

神谷 よろしく願います。

石賀 それでは早速議論に入っていきたいと思いますが、議論に入る前に皆さんと一緒に前提を共有したいと思います。こちらのグラフは、国際協力ボランティア派遣参加人数の推移グラフになります。山田さん、こちらのグラフについて説明をしていただけますでしょうか。

JICA海外協力隊派遣者数推移

年度別派遣者数の推移



<https://www.jica.go.jp/volunteer/outline/publication/results/jocv.html#r04>

資料2 (JICA, H.P.より)

山田 本日の登壇者4名の共通点は、青年海外協力隊経験者ということになります。現在は、JICA海外協力隊と呼ばれています。一九六五年からスタートしてどんどんと右肩上がりに伸びてきたのですが、それが二〇一〇年あたりをピークにガクンと落ちています。その後もう一度持ち直してきたのですが去年今年のコロナの影響もあり、派遣されていても国内待機という形が続いている状態です「資料2」。今は数値が落ちていますが、それでもそれはコロナの影響ですが、その前にガクンと落ちている辺りが東日本大震災の影響があるのではということをしてJICA職員の方がおっしゃっていました。海外にボランティアに行っている場合ではない、国内でボランティアするべきことがたくさんあるのでは？といった状態が国内にあったと考えられます。

石賀 ありがとうございます。皆さんご覧になっているグラフは、今説明があった通りですが、ある年を境に、おおよそ二〇〇九年辺りですかね、青年海外協力隊の参加者が下がっています。その頃に何らかのゲームチェンジャーがあったのかなとも考えられます。二〇〇九年頃といいますと、オバマ大統領

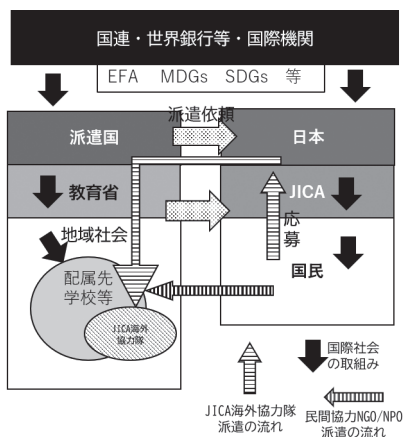
就任や、ガザの侵攻があったという時代背景です。また、スマホが流行しだしたのが二〇一〇年頃ということですから、それがゲームチェンジャーかどうかわかりませんが、参加人数が減ってきていることに關して藤掛さんはどういうふうに考えられますか？

藤掛 そうですね。内向き志向ということがよく言われるのですけれども、もしかしたらそれは情報が偏ってしまっている可能性もあるのでは、とも考えられます。例えば横浜国立大学ですと、海外研究スタジオというところと関係しているのですが、みんな海外に行きたい、コロナであつても行きたいと、行きたい方たちは沢山いらつしやると思います。ですから、内向き志向という言葉にはちよつと違和感を持っております。チャンスさえあればいける場所や空間と、海外に行くにはお金がかかりますが、お金がかからない方法として、ICT等を活用してつながっていくことはとても大事な気がいたします。確かに若干のボランティアが減っているということはございますが、日本の経済状況とか、JICA海外ボランティアに行くと、帰国後仕事が見つけにくいとかといった状態もあるかと思ひますので、民をあげてと言ひますか、こういう海外の経験をする、帰つて来たらもつとすごいチャンスがある、という仕組みを社会で作つていくと良いと思ひます。

石賀 ありがとうございます。制度設計の問題もあつて、今の若者が内向きというのは簡単な答えではありませんが、必ずしもそればかりではないということですね。後ほどさらに深掘りして行きたいと思ひます。

それではここで、もう一枚山田さんの資料を共有していただき、この説明をしていただいてよろしいでしょうか。

山田 先程、JICA海外協力隊の派遣の推移についてのグラフをお示しましたが、ここで派遣の仕組みがどう



国際教育協力の各種アクター
派遣国地域文化に派遣される関係構造図

資料3

なっているのかという図がこれになります[資料3]。まず、国連とか世界の国際組織から、SDGs等の取組みが世界規模で各国に求められていきます。日本も国際協力派遣先の国々も同じ状況です。

具体的には、図の政府開発援助人材派遣の流れの矢印になるのですが、もしJICA海外協力隊に行こうという場合に、日本のODA政府開発援助で日本の場合にはJICAが担当していますが、その募集に応募して、選考後訓練を受け派遣されるという仕組みになります。一方、国際協力先の派遣依頼を出しているのは、教育関係の場合、政府や教育省といったところになります。それがこの派遣依頼の線になります。

それに対して派遣されるJICA海外ボランティアは、派遣国の形式的には教育省等に派遣されるけれども、実質の配属先は地域社会の学校等の教育機関になります。そこでの学校現場や地域社会では中央政府レベルとは様々な意識の違いが見られます。

例えば、SDGsより以前の一九九〇年に始まるEducation For All: 万人ための教育において、初等教育完全修了等の目標が設定され、各国にその取り組みが求められました。政府としては100%達成を目指しますが、識字率にフォーカスすると、例えばボリビアの場合、公用語はスペイン語になりますが、住民の生活言語はケチュア語やアイマラ語等の現地語があり、それぞれの地域住民の意識は政府とは違ってきます。このように、矢印が派遣先の地域社会や配属先に降りてくる過程で、意識の違いといったところが顕著になり、要請に応じて派遣されてきたにも関わらず、配属先に

は求められてはいないといった状況が生じるケースも起きうる、といった派遣の流れの構図になっています。

神谷さんの場合はODAの派遣ですのでこの説明の流れになります。矢加部さんの場合は民間協力のNPO法人ですから、民間協力人材派遣の流れの線で示された直接の派遣になります。

石賀 矢加部さんの場合、神谷さんのようなODAと違って、図の黄色の矢印のところの民間としてダイレクトに現場に入られて活動されているという違いがあることがわかります。国を通してのオーダーの中では国と国、国と地域、地域と人、人と人等様々なガバナンスの問題があるといえそうです。当然そこにはステークホルダーの存在もあるのではと考えます。なんとなく我々がイメージしてきている国際協力とは、現地の方と肩を組んで笑顔で写真に写っているようなイメージが想像できるのですが、それとは違った語られてこないような様々なボトルネックがあることが浮かびあがってきているという状況です。

まず前半では、今回のパネリストの皆さんに国際協力に関し、何がボトルネックになっているのか、何が課題か、何に一番時間をかけているのか等、それぞれの現場からお話いただこうと思っています。それぞれのパネリストの皆さんにはボトルネックはこれだというキーワード・キーセンテンスを選んでいただいていますので、そのことを含めてご自身のお考えなどを伺えればと思います、

まず初めに、神谷さんからよろしいでしょうか。神谷さんは、「質の高い教育への道のりの難しさ」がボトルネックとしてある、とおっしゃっています。

神谷 私が今話を聞いていて思ったのは、私どものようにODA…政府開発援助として、政府間の合意に基づいて派遣されるケースの場合、たとえ相手が現場の方であったとしても、その上にある政府という組織を通して派遣



第二部 会場風景

が今の話を聞いて思ったところです。

一方、今スライドで見ていただいているところですが、30年近く国際協力の現場にいますけれども、今一番危機的だなと思っている点は、人口急増の中でどういうことができるかということです。次のスライドを見て頂きたいと思います。途上国の急激な人口増加、これは日本にいたらなかなか感じることはないのかもしれませんが、日本にやってくる在留外国人は、ひと昔前は100万人と言われていたものがコロナ前には200万人です。それぐらい多くの方が日本にやってきました。

されることになります。

エジプトの場合、この政府の人達が活動する中で、現場を知らないという状況も見られます。現場の視察に行くことが忙しくてできないという中で、現場の状況を知らないまま机上でこういうふうにするべきといった写真の計画が作られていくようなところも見られます。例えば、今私たちは就学前教育の事業に関わっていますけれども、その中でよく言われているのは、しっかりとした保育士育成の仕組みを作ることなのではないか、しっかりと現場を回ってモニタリングの仕組みを作ることなのではないか、というような話がよく出てきます。

しかし、現実にはそのモニタリングなり保育士研修を実施するにしても、そのための予算の裏付けであるとか、それをやる人材がいるのかというようなことがあまり意識されないまま計画を進めてしまうようなところがあります。このようなことが非常に大きな課題だと思っています。それ

質の高い教育をみんなに！ と言われても……

A-3

SDG s 質の高い教育をみんなに！

すべての人々に包摂的かつ公平で質の高い教育を提供し、
生涯学習の機会を促進する

- ・みんな……って誰？
- ・教育格差の顕在化は社会の不安定につながる
- ・子供中心の教育と求められる教育の差異、その教育を担う教育者の意識のギャップ

資料4

現場の目線で見ると、このスライドにある通り、一九九九年には世界の人口は60億です。それが現在になると77億人になります。この人口の急激な増加によって、ありとあらゆるところにしわ寄せがやってきました。この右にグラフがありますけれども、これはエジプトの人口の構成になります。見ていただくと分かるように、25歳以下の人たちが多くの人口の割合を占めていることになります。この人たちにどういう仕事や教育を社会として提供していくことができるのか、ということが非常に大きな問題になっています。

教育というところで見ますと、エジプトの場合、毎年約250万人の子供たちが生まれるのですが、そのうち就学前教育に通う子どもたちは15%位です。これをどういう形で教育の質を高めていけるのかということを考えながら全体の図を作っていないければならないという状況です。

次のページを見ていただきたいと思います。皆さん、日本でもよく言われているSDG sの中に「質の高い教育をみんなに」と書かれています【資料4】。でも、どう思われますか？ みんなって誰のことなのでしょうか。先程お話したように、エジプトの就学前教育は、15%の子供達が幼稚園なり保育園なりに通っている

ということになります。エジプトは大国ですので、それなりに教育は提供されています。初等教育になればその比率は高くなるのですが、77億人いる世界の中で、この「みんな」っていったいどういうふうに考えるのかということです。

あと、先ほど第一部でもお話がありましたけれども、教育の格差問題があります。この格差に対してどのように世の中が関わっていくのか、これは大きな課題であると思っています。子供中心の教育、これは日本では当たり前なのですが、これがなかなかそうなっていないという現状があります。先ほどお話したように150万人の子供が生まれる中で、親としては競争が始まっていくという意識が生じてきます。

日本では、子供たちは楽しく自発的にいろんな活動ができるような環境を作っていきたいということになるかと思いますが、エジプトでは、読み書きそろばんのようなところをどうしても優先させ、しつかりさせることで初等教育の準備をしたいという方向になってきます。そのあたりの教育に対する考えの差異が課題になっているといった状況です。私からはとりあえず以上です。

石賀 ありがとうございます。SDGsの重要な点として、期限を決めて制約の中で条件を出していくというところがあるかと思うのですが、その時に神谷さんがおっしゃる通り、「みんなって誰なんだ？」という議論が上がつて来るべきですね。そして「みんなという概念をどう捉えていくのか？」ということが次の話題になっていくのかなと思います。

この点に関して、藤掛さんはさんどのようにお考えでしょうか。誰にとつての質の高い教育なのか、国や地域個人にとつてそれぞれ違う質の問題があり、そのような点に関していかがでしょうか。

藤掛 私も実際バラグアイの学校において活動や教育支援をさせていたのですが、その時にいつも思うのですが、国が目指す優秀な人材を育成する事が教育支援だと考える方がいる一方、私の場合は村で学校に行くことができない子供が、小学校を修了したら農作業に行かなくてはいけない子供たちにとって、中学校に行く、もしくは小学校も中退してしまう子供達にとって小学校を修了するチャンスがあれば中学校に、チャンスがあれば高校大学にいつてもらうということを考えています。

ここで一つ分かれていますね。誰に教育をとといった場合におそらく効率的なことを考えると——効率という言葉そのものにも議論がありますけれども——そう考えた時に、村の子供たちよりも、もうちょっと国づくりを担ってくれる人たちにお金を使った方が良いと言う考え方が一方にはあると思います。なので、SDGsの「全ての人に」という考え方についてどのように私たちが真剣に考えなければいけないのかということは、大きな問題であると考えます。

石賀 なるほど、経済の発展が、例えばカーボンニュートラルの問題にしても二酸化炭素を出していない発展途上国の国に多くのしわ寄せがいつている現状がある点を考えてみても、その人たちにとって、二酸化炭素を出さない取り組みよりも、その前に私たちはもっと発展したいんだとか、経済的に豊かになりたいんだとかと思っているのかもしれません。この何が求められるのかという点では、それぞれの立場で多様であると思います。山田さんどうですか。

山田 神谷さんからのお話の「教育の質」という観点で言えば、先程私が申し上げた一九九〇年の Education For All での重要なテーマの一つとして挙げられています。具体的には、多くの途上国の学校教育では、先生が黒板に

「ここに内発的というのは内から自然に出て発展するという意味でちょうど花が開くようにおのずから蕾(つぼみ)が破れて花弁が外に向うのいい、また外発的とは外からおっかぶさった他の力で已むを得ず一種の形式を取るのを指したつもりなのです。」

夏目漱石『現代日本の開化—明治四十四年八月和歌山において述—』

資料5

字を書き、子供がそれをそっくりノートに写し取るというような教育が行われています。日本では無料配布されている教科書を、自分のノートで写し取っていきながら作っていくような現状があります。テストでその通りに答えればよいというようなシステムになっている状況が多く見られます。

私の場合はパラグアイで活動したのですけれども、6年間ずっと1年生をやっている子どももいました。そのような現状がある中で、美術教育の場合、先生が黒板に絵を描き、その絵をそっくり写し取るといった教育方法がとられているような教育方法がとられている国々がかなりあるといった状況です。そのあたりが質の問題になるかと思っています。

石賀 ありがとうございます。それでは今度、矢加部さんにお聞きします。今のお話とおそらく関係すると思われるのですが、矢加部さんがお考えのボトルネックということで「現地への理解」というキーワードをいただいています。はじめに、興味深かったのは夏目漱石の言葉で、このあたりのことをなぜ冒頭に持ってきたのかということも含めてお話しただけだと思います。よろしくお願いいたします。

矢加部 はい、よろしく申し上げます。

これは、内発的と外発的について夏目漱石が現代日本の開化について公演し

た時の文章を入れさせていただきました【資料5】。高校の時に習ったのですが、そのときは面白いなと受け止めてはいても深くは考えてはいなかったのですが、NGOで活動するようになってからは、自分自身への自戒も込めてこの文章を思い出すことが数多くありました。自分の中の課題としてシンボリックなものであったのでここで紹介させていただきます。

内発的・外発的がどのような課題につながるということですが、私は現地自体が持っている課題というよりは、国際協力を行う実施者側の課題として現地との関係が重要になってくると考えます。国際協力による支援は、外からの国際組織であつたりNPO、NGOであつたりしますが、支援に現地と外発的な関わりを持つことによつて内発的な変化を促して行くという形が多いと思います。その時に外発的なきつかけが、個々人、コミュニティや社会そのものが内発的に変容していくためには時間がかかります。

漱石が先ほど外発的な変化について語った言葉の中で、「通常の段階を一足飛びでするようなものだ」という表現をするのですが、やはり外発的なきつかけというのは無理であつたり、一足飛びであつたりして難しい問題が生じます。持続するののかという視点で考えた時に、時間をかけた内発的な変容が欠かせないのでは、ということを経地に入って感じます。

なぜかというと、育ってきた環境、民族、文化、宗教的な背景、成長過程での経験が、個人の思想や考えや生活を形作っている点が挙げられます。また、社会に根付いた価値観や生活様式、環境があり、私たちが見ているものと、現地の彼らが見えているもの・ことの範囲や目指す方向性の絶対的な違いがあるということを感じます。ただし、支援事業を実践していて、たまに短期間で成果を求めたりしてしまうと、そのような点が読めなくなってくるものが起きてきます。そのようなことを自分自身が感じることもあり、漱石の言葉を思い出すようになったということになります。

課題 現地への理解

- 国際協力・支援では、現地が外発的な関わりを持つことで、内発的な変化が促される
- 外発的なきっかけから、個人やコミュニティ、社会そのものが内発的に変容していくためには時間がかかる
- 育ってきた環境、民族・文化・宗教的な背景、成長過程での経験が、個人の思想や考え、生活を形作っている
- 社会に根付いた価値観や生活様式、環境があり、見えているもの・ことの範囲や目指す方向性が違う

資料6

カンボジアでの芸術教育を行なっているので、基本的に対象者は教育相の担当官であつたり学校の先生であつたり地方の教育局の方であつたりします。彼らがどのような社会背景の下で、芸術教育というものがどのような社会認識にあるのかという点が、とても大事なことになるてきます。事業を進める上で、そういったことに関して、理解を深めていくことが必要となります。カンボジアでの芸術教育の場合は、

・ 歴史的背景による教育システム、芸術文化の破壊
・ 家族や親族単位で芸術の担い手になる場合が多く、特定の人たちのものという社会認識が強い

・ 一般的に、職業としての画家や音楽家になるための技術や知識を習得するための教育と認識されている

・ 社会や教育課程における優先順位が低く、それに関わる人の立場が弱いことで、自ずと関わろうとする人材が少なくなる
・ 上記の結果、継続し、自発的に動くための具体的な動機を見いだすことが難しい

等が挙げられます「資料6」。そのために良い形で内発的な変化を促すための課題として次のようなことがあります「資料7」。

事業の中では、短期間の研修で学んだり話を聞いたりしただけ

事例： 内発的な変化を促すためのヒント

- 短期間の研修で学んだり話を聞いただけで、理解して実践につながることはほとんどない
- 時間をかけ、体験を通して、児童にとっての芸術教育のよさ、おもしろさ、大切さを関わる人自身が実感し、その上で理解を深めてもらうことが行動の変化につながる
- 「よい＝すべき」ではなく、彼らの社会基準の中で、何らかのメリットを見いだせるような仕組みも必要
- すべての過程に関わることによって、彼ら自身が時間や労力を使ってできた成果であるという価値づけが、継続性へつながる

資料7

で、理解して実践につながることはほとんどなく、自分自身の活動を振り返ってみても研修会が効果を上げることはなかなか難しいことを感じます。

そういったことを前提として、時間をかけ、体験を通して、児童にとっての芸術教育のよさ、おもしろさ、大切さを関わる人自身が実感し、その上で理解を深めてもらうことが行動の変化につながることを感じます。また、「よい＝すべき」ではなく、彼らの社会基準の中で、何らかのメリットを見いだせるような仕組みを作ってあげることも必要で、彼ら自身の内的変化を生むヒントになるのではないかと思います。

あと、ゆっくり一緒にやることによって、全ての過程に関わることで、彼ら自身が時間や労力を使ってできた成果であるという個人的価値が生じ、その価値づけが継続性へつながるのではと考えられます。

最終的には、その活動効果や目的としては、子供たちの姿を見もらうことが芸術教育の場合、彼らの心を動かすところがあるのだ、子どもたちが授業の中で楽しんでいる様子をたくさん見ってもらうことによって、彼ら自身の中に変化が生まれてくるようなことになってくれればいいなと思っています。

以上になります。

石賀 ありがとうございます。お話を伺っていて、8年間本当にご苦労されたことがひしひしと感じられます。具体的には、美術教育よりも、家庭や教育現場がそれどころではないというようなことを言われたりするような場面があるということでしょうか。

矢加部 我々が提案することに対して直接反対意見をもらうようなことはないので、口ではいいねと言うけれども、現実的にはそのような動きにはなっていない状況もあります。彼らもやらなければならないことが山積していますし、もつと別の彼らが目指す方向性があり、それがあるといいう状況をわかった上で一緒に寄り添っていく必要があります。彼ら自身がやりたくなる状況と一緒に見つけていく、ということを実際協力で行っていくべきではないかと思っています。

石賀 なるほど。神谷さん、今のお話を聞きしていかがでしょうか？ 色々思うところがあるのではないのでしょうか。

神谷 今のお話を伺っていて、第一部の講演で渡部さんが「やっぱり自分たちでやっていく」とおっしゃっていたことを思い出しました。まさにそこだというふうに思っています。私たちの支援というのは、彼らが自分たちでやっていくという思いを持ってもらうということが大切であると思います。私は今、保育士さんたちの研修をやっているのですが、その中で9日間位の研修があります。そこで得る知識がもちろん大切なのですが、ただ一方でその

研修の最後の修了式に、私が——実は昨日も50名ほどの保育士の方々の修了式があつたのですが——そこで熱く語るにはいくつかのポイントがあります。

一つは、皆さんが未来を担う子どもたちに何ができるのかを真剣に考えて欲しいということ、もう一つは、皆さん自身が力をつけて欲しいということです。保育士はただ子どもたちの面倒を見ているだけ、とエジプトでは未だ社会から見なされている現状がある中、皆さんがしっかりと子どもたちの成長を担う重要なアクターであることを社会に知ってもらうためにも、力をつけてもらいたいと思っています。それに伴って先ほどお話したとおり、社会に認めてもらうこと、これが大切であると思っています。そのために研修を受けてもらっているのです。

まだエジプトでは女性の社会的地位が低いという現状があり、いかにして保育士の社会の中での地位を上げていくのかということも大切です。子どもたちへの関わりと同時に、保育の担い手の人たちにエンパワーしていくことが大事であるということを感じます。

石賀 ありがとうございます。藤掛さんはいかがでしょうか？

藤掛 そうですね、内発的發展とかエンパワーメントとか、私がやっているような献金システムとかまさにそれです。私自身が協力隊で28年前、パラグアイにいた時、その時に活動したその成果を、その後3年後、5年後……ずっと見ていく中で、女性たちがすごくエンパワーしていくのです。2年とか、限られた期間でできることが、5年とか10年とかかけてやっていくことがだいぶ違ってくる。あと国際協力の成果をどうのように測るのか、ということです、数字だけで測るのか、それとも人々の意識変容とか満足度とかどのぐらいのスパンで見えていくのか、ということをきちんと考えていくべきであると思います。

協力する側のやりたい思いだけで、すぐく成果が出ているように見えるけど、実は地域の方々は、ボランティアが一生懸命やつてくれているから、そうだよねという形で見てくれているけれども、活動終了後はその活動は継続されなかったというようなことが起きてきます。そのようにならないようにすることが内発的支援だと思います。私はそれをずっとやり続けて28年経ってしまいました。

石賀 そのことに関しまして、山田さんは博士論文の中でもノコギリ型協力効果として触れていますが、いかがでしょうか。

山田 協力隊派遣の場合、3代に渡って一つの配属先に派遣されるケースがよく見られます。一人目の活動がだんだんと成果を上げますが、任期が終わって帰国するとそれがゼロに戻る。次の派遣者もゼロから始め、同様にだんだん成果を上げるけれども、やはり帰国後はゼロに戻る。3代目の派遣者も同様の状況が見られ、結局その後、誰も来なくなったら元の状態に戻ってしまう。このようなノコギリ型の協力効果というような課題が見られます。これが協力隊派遣当初によく見られていましたが、昨今でも同様のことが見られるケースがあります。それをどのようにバトンを引き継ぎながら、協力効果を持続させていくかということが重要になってきます。

先程、神谷さんがおっしゃっていたように、国際協力の技術協力という分野にあたるところでの協力手法になりますので、それぞれの専門分野の、スキルやノウハウを配属先に伝えることを目的としています。伝えに行つて、我々がいなくなった後にそれらが残ればいいわけです。しかしながら、現実的には無料の代用教員として、またマンパワーとしてのみの役割に終始し、いなくなった後には何も継続されない等の様々な課題が浮かび上がってきます。

石賀 ありがとうございます。難しいなと思ったのは、残していく教育が、国が求めているものであっても、地域が求めているものではない可能性も起きてくる。そのような様々なステークホルダーや理念がぶつかっていく中で、現場に飛び込んで行った時のご苦労、並大抵ではないであろうか思うところです。その辺りは本当に難しいところであろうと思います。

藤掛さんにその辺りのことを伺いたいと思います。藤掛さんのキーワードは、「認識の差」ということで、対話不足による認識の差、ということですが、そのあたりについてスライドを見ながらお話しいただいてよろしいでしょうか。

藤掛

認識の差というのは、いろんな意味で認識に違いがあるということです。具体的には、国際協力という



山田猛

協力隊や専門家の方々に期待している村の人たちであるとか、行政官の認識と、こちらが届けたいと思うているその認識の差っていうものを、埋めていく必要があると思うのです。それはSDGsとかでも、数字とか出ていますが、しばしば数字では測れないことがいっぱいあると思うのです。それらをうめていく対話が重要なのです。ダイアログとしてのアクションリサーチという、私達人類学者がやるものなのですが、現場の方たちが何を求めているのかというところに寄り添っていくところのリサーチが必要になってきます。これがすごく重要なことだと思うのです【資料8】。

私が協力隊として村で活動していた時に、オートバイで転んだ時があったのです。その時に、遠く離れた村の女性とお子さんが今日講習会でうち

大きな問題意識

問題意識：人々の意識変容、数字のみの評価に疑問、
中間組織の重要性、「豊かさ」とは何か？

- ・人々のエンパワーメントなど質的な変化が社会を変えていく大きなエネルギーとなる。しかし質的なものは実証主義の立場からは質的なものは「客観性」を担保できないといわれてきた。
- ・政府開発援助のような大きな枠組みでは掬い取ることのできない支援があり、NPOなどの中間組織が重要であること、そこにはジェンダーやダイバーシティの視点が必要であるという問題意識がある。
- ・「豊かさ」とは何か？当事者が考える豊かさを大切にす
る支援とは何か？

資料 8

の村に来るはずだったのに来ないわけです。それでおかしいと思って、遠く離れた村から駆け寄って来て下さったのです。そうすると私は倒れていて、血を流していたわけです。それを見て、彼は自分の服を裂いて止血をしてくれたのです。日本人がそういうことが出来るかなって思った時に、20代後半だった私はできないのではないかと思ったのです。「この優しさって一体何だろう？」と思った時に、私は支援をしに来ている自分がいて、国際協力として支援をしているというけれども、これは相互理解ではないのかなと、思ったのです。そういうことも含めて、国際協力のあり方というものを、当初から問い直すチャンスを感じたと考えます。

一枚目のスライドで、女性たちがエプロンをつけて、帽子もかぶっていた写真がありました。その中で加工食品のプロジェクトの活動をやっていたことがありました。

このようなプロジェクトを協力隊時代にやっていて、2年3ヶ月経って、頑張って学校建設もしましたし、自分としては良かったと思うのだけれども、その後どうなっていくのだろうということを考えておりました。その後JICAで、少し仕事をさせて頂いた後、またパラグアイの村に帰りました。そうすると、村の女性たちが一生懸命当時の活動を継続していたのです。この継続し

ているところを研究したいと思ったのが、今の自分の研究のきっかけになっています。

結局、ポイントは小さなことをコツコツと続けることで、自分たちの採れた野菜を加工食品として販売できるとか、たとえ失敗しても次に活かして販売に繋げる、*step by step* でエンパワーしていくことです。その後、私は一九九六年に協力隊員として帰ってきて、その後も二〇〇〇年を超えてずっと見ているのですが、持続可能になっているのです。持続可能というのは、やはり自分たちが、やった、できた、自信を持った、じゃあ、次にこれに挑戦してみたい、というようなことだと思います。そうすると、エンパワーメントというのは、質的な変化で評価をする時に数字ではなかなか評価できないものです。実証主義的な立場からすると客観性って何だということになります。それは数字でしよと言われますし、質的研究であればたった一人の問題でしよ、という意見もあります。国際協力における質の変化というのはとても大切なことであると思います。2年限定というのではなく、良い種をまいて、その種がきちんと育って花を咲かせるようなやり方が、本来の国際協力の手法であると思います。客観性という意味でも、人々の質的な変化も大きな成果であるということを認めていく必要があると思います。豊かさとはどういうことか？ ということをよく考えさせられます。

次のスライド「資料9」は、私は学校を創らせていただいたのですが、初めは小さな小屋のようなところから、村の方々の力によつて大きくしています。次のスライドは今やっている生活改善のプロジェクトなのですが、*step by step* アプローチとして、現在は違うステージのアプローチをしています。女性たちが家の前に自分たちでこのような売店を作つて販売するとか、本当にかつては考えられなかったような副産物も生まれています。このような副産物が生まれてくるようなエンパワーメントを生み出すデザインが求められると思います。自分たちが自分の足で歩いていくために、女性達や男性達や子ども達が自分達の社会を変えていく、自分の人生を自分で掴み取っていくという力が必要であると思います。

パラグアイに学校建設支援

* 南米パラグアイ共和国農村部やスラムにおける
子どもたちへの教育支援や生活改善支援を行っています。

第三校目の学校建設支援

第四校目の学校建設支援



ホームページ：<http://mitai-mitakunai.com/>

資料9

私のような人類学の外部者が入ること、それを「支援」と言ってしまうと、こちらが偉くて支援される人は足りていないような感じになってしまうのは、やはり違うと思います。互恵の関係で、私も現地に入らせていただいて、私の学生も現地に入らせていただいて、沢山の教えに学ばせていただいており、常々豊かさとは何か、人として生きるといふことは何かといふことを教えられています。国際協力というのは、本来お互いに学び合う場であり、そのやり方によつては地域の方々のチャンスを奪ってしまう可能性もあるかもしれないことも考えつつ、そのプロセスを互いに気づき、発見していくということじゃないかと思っています。

石賀 ありがとうございます。

次のスライドですが、ログフレーム（戦略通りに事業が実施されたのかを測る論理的評価）という論理的枠組み外のことに目を向けられているように見えます。ジェンダーの問題は、現地で論理的枠組み外のことなのでしょうか？

藤掛 そうですね。ジェンダー問題は難しいですね。社会的文化的な様々な要素が入ってきます。例えば宗教的も含まれたりしま

ログフレームから捨象されるものは何か？

- PCM (Project Cycle Management) を実施し、PDMという平面図に落とす「原因／結果モデル」を用いる。実証主義的アプローチを前提としPDMを作るらざるを得ない。
- 文化人類学／開発人類学者である報告者は、開発実践と研究における矛盾や対立について感じてきた。また、ログフレームを作成する段階で社会の複雑性が捨象されてしまう点も懸念を抱いてきた。
- ログフレームから捨象されるものはなにか？
- どのような評価が持続可能性への貢献になるだろうか？
- カーゲンは、実証研究と社会構成主義の関係性について「原因／結果モデル」に焦点を当てた際、以下の点を指摘する。

実証主義においては、「原因／結果モデル」一あらゆるできごとは、それに先行するモデルにもとづいている。すなわち、人間科学において、人間のあらゆる行為の原因は、その前の状況（環境的、心理学的、遺伝的）の中に突き止めることができるはずだと考えられている。しかし社会構成主義からの反論は、「原因／結果」という考え方は、そもそも社会的に構成されたものであり、「原因」や「結果」というものが、自然に存在しているわけではない。それらは、観察されたものの中に「読み取られる」のだ（カーゲン 2004:136-138）。

人間自ら行為するという人間主義的な考え方を社会構成主義が客観的事実と見なしているわけではないが、人間の主体性をもっと大切にすることがあり、社会構成主義はどんな伝統や生き方にも、一定の価値と理解可能性があるとする（ibid:140-141）。

とカーゲンは主張する。

出典：藤掛洋子（2020）『『パラグアイ農村女性改善プロジェクト』の評価にかかると考察—日本研修を通して紡がれた直接受益者の関係性の強化と『エンパワーメント』を事例として』『国際開発学会第31回全国大会』

すし、最近はいんターセクショナリティといって階層・階級のような、そういったものも含まれてきます。ログフレームというのは直線的なものであるため、直線的ではない発展、エンパワーメントというのは、失敗して落ち込んだりしつつも、もう一度頑張ってみようとか、そういうことの中でぐるぐる回っているため、そこから拾いにくいものとなっています。しかし、OECDとしては評価をしようと思えてきているため、ログフレームではないものの、直線的なではないものを拾おうとしている努力はしているので、我々も変わっていく必要があると思います。

石賀 美術の先生方も何人もご覧になっているのですが、大きくうなずくことも多いかと思います。このように数字で計ることが大変難しいことの中で、ログフレーム外として捉えられがちなところをどのようにエンパワーメントしていくかが、あらゆる教育活動にかかわる者にとって、共通な問題であると考えられます。山田さん、お話を伺って、どうですか？ 同じパラグアイに行かれていたと伺っています。

山田 そうですね、藤掛さんとはパラグアイで1年、活動期間が重なっていました。国際協力効果を生み出すことや効果を図ることの大変さについての話題に関して、我々が何故このような国際協力に関わっているのかというと、やりがいがあつて教えるより教えられるという経験をするからで、それがなかったらその後関わっていかないかと思います。日本の現場では得られない感動を得難い場面がそれぞれあるからだと思うのですが、そのような話では話題から逸れてしまうので、自分の研究分野である国際協力の美術分野について触れさせていただきます。

この分野での国際協力現場の最前線の人たちの苦労が何であつたかという点に関して、質的分析によって浮かび上がってきた多くの壁の中で、一番大きな要因が、「立場の違いによる意識の格差」です。具体的に言うと、校長先生は美術教育が必要だと思つて派遣を依頼したが、現場の先生たちはそのようには思っていない。場合によつて

は、「あなたが来たことによつて、もしかしたら私がクビになるかもしれない」というような発言も見られ、軋轢が生じたりすることがあります。もしくは、教育委員会が美術教育を必要と考え派遣依頼をしても、学校現場ではそのように受け止められてはいない状況も生じてきます。そこで、協力隊員が一生懸命授業準備をして、素晴らしい実践をしたとしても、現場の先生方は、「すごいね、でも我々は多忙で、あなたのように時間をかけて準備はできない」という感想をもたれる場合もあります。協力隊員が頑張れば頑張るほど、現地の先生方はそれを受け止めてもらえなくなるような悪循環も生じることがあります。

先ほどのSDGsの話で言えば、政府としては識字率や修学率の向上を目指しても、教育現場が抱えるそれぞれの地域の生活文化として、例えば保護者の立場として、うちの子がこの地で生きていくための羊の飼いや仕事に必要な知識を教えることが求められていることもあります。また、多様なニーズの違い、フェーズの違い、さらに紛争地等の問題もあり、様々な要素が交錯している状況が現場によつて違いがあります。

そこで、JICAへの派遣要請を見た上で募集に応募し、実際に訓練後、現場に派遣された場合、実は依頼から派遣まで2〜3年かかることもあるのですが、いざ派遣されてみると、派遣依頼を出した人はすでにおらず、そのような要請はしていないと言われることも起きることがあります。このようなタイムラグは、誰が悪いということではなく、国際協力の派遣システム上生じてくるのですが、派遣国や配属先において、様々な立場の違いの板挟みになることが、国際協力の活動場面の最前線での苦勞として浮かび上がってきています。

石賀 ありがとうございます。喜びもあれば大変なこともあり、制度の問題というか、山田さんがおっしゃったように、誰が悪いという訳ではなく、それぞれの制度や価値観によつて色々な問題があるのだけでも、藤掛さんとしては認識の差を超える上で対話がキーワードになるのではということですね。

前提

JICA 海外協力隊派遣推移

2009年 15.5



教育のつなぐ

国際協力 × ZOKEI のポテンシャル

シンポジウム 2021

2021. 10. 02 [SAT] 13:00 - 15:30

内閣を信用してよりかは、海外での経験が、
チャンスが偏っている？



外からの新たな変化
(外発的な変化)
→ 現地に目を向けたいとの
デマンド
増える



国際協力 × 支援
し、お互いに
学び合う！

国際協力 × 支援
し、お互いに
学び合う！

いよいよ 情報

何に一番課題を感じているのか？

BOTTLE NECK

総額 1 途上国への支援人口増加
皆、高い教育とみんさんに
SDGs: 期限を決める



人口急増の中で教育格差、
教育への意識の差

成功
成功
成功

現地への理解
現地への理解
現地への理解

内発的な変化
内発的な変化
内発的な変化

国際協力 × 支援
し、お互いに
学び合う！

国際協力 × 支援
し、お互いに
学び合う！

国際協力 × 支援
し、お互いに
学び合う！

1990 - Education For All
→ 現在と同じ過程の国に

1990 - Education For All
→ 現在と同じ過程の国に

1990 - Education For All
→ 現在と同じ過程の国に

1990 - Education For All
→ 現在と同じ過程の国に

1990 - Education For All
→ 現在と同じ過程の国に

1990 - Education For All
→ 現在と同じ過程の国に

1990 - Education For All
→ 現在と同じ過程の国に

1990 - Education For All
→ 現在と同じ過程の国に

1990 - Education For All
→ 現在と同じ過程の国に

1990 - Education For All
→ 現在と同じ過程の国に

1990 - Education For All
→ 現在と同じ過程の国に

1990 - Education For All
→ 現在と同じ過程の国に

1990 - Education For All
→ 現在と同じ過程の国に

1990 - Education For All
→ 現在と同じ過程の国に

1990 - Education For All
→ 現在と同じ過程の国に

1990 - Education For All
→ 現在と同じ過程の国に

1990 - Education For All
→ 現在と同じ過程の国に

1990 - Education For All
→ 現在と同じ過程の国に

1990 - Education For All
→ 現在と同じ過程の国に

1990 - Education For All
→ 現在と同じ過程の国に

1990 - Education For All
→ 現在と同じ過程の国に

1990 - Education For All
→ 現在と同じ過程の国に

1990 - Education For All
→ 現在と同じ過程の国に

1990 - Education For All
→ 現在と同じ過程の国に

1990 - Education For All
→ 現在と同じ過程の国に

1990 - Education For All
→ 現在と同じ過程の国に

1990 - Education For All
→ 現在と同じ過程の国に

1990 - Education For All
→ 現在と同じ過程の国に

1990 - Education For All
→ 現在と同じ過程の国に

1990 - Education For All
→ 現在と同じ過程の国に

1990 - Education For All
→ 現在と同じ過程の国に

1990 - Education For All
→ 現在と同じ過程の国に

1990 - Education For All
→ 現在と同じ過程の国に

1990 - Education For All
→ 現在と同じ過程の国に

1990 - Education For All
→ 現在と同じ過程の国に

1990 - Education For All
→ 現在と同じ過程の国に

1990 - Education For All
→ 現在と同じ過程の国に

1990 - Education For All
→ 現在と同じ過程の国に

1990 - Education For All
→ 現在と同じ過程の国に

1990 - Education For All
→ 現在と同じ過程の国に

1990 - Education For All
→ 現在と同じ過程の国に

1990 - Education For All
→ 現在と同じ過程の国に

* * *

石賀 ここで大きく話題を変えさせていただきまして、「造形のポテンシャル」という、本シンポジウムの本来のテーマに、本題を移させていただきます。これからお一人ずつ、造形のポテンシャルについて語っていただきたいと思います。矢加部さんからよろしいでしょうか。

矢加部 美術教育普及に携わっているので、日々いろいろな場面でそのポテンシャルは感じるのですが、今、自分がこの場にいるということについても含めて、そのターニングポイントになった話をさせていただきます。現在の仕事でカンボジアに来る前に、東ティモールという国に、青年海外協力隊として派遣されました。そこはかなり若い国であり、教育やインフラ等でもかなり問題があり、若者の非行問題が深刻でした。非行に走る若者が、ギャングに入ったり、クルマを燃やしてみたり、酒に溺れたり コミュニティで喧嘩をしたりする数かなりに登り、それが社会問題になっていました。その課題に向かう現地の平和構築目的のNGOに二〇一二〜一三年に派遣されていた時に、At risk youths を対象とした平和啓発プロジェクトを実施しました。非行に走っている、もしくは非行に走った若者から影響を受けた立場にいる子どもたちを対象に英語や平和教育などの基礎教育と、絵画、写真、演劇、音楽などの表現活動を組み合わせた半年間のプログラムを受け、プログラムの最後に自分たちの作品を通して平和へのメッセージを伝える Peace Festival を自分自身のコミュニティで開催しました【資料1】。

そこで私が写真を専門にしていたこともあり、写真を撮影する授業に入っていました。彼らはおおよそ15〜20歳くらいでしょうか、見た目は厳しい感じでした。実態はデジタルカメラを初めて触ったという状況でした。最

東ティモール／Timor Leste

2002年にアジアで一番新しい国として独立した、平均年齢は約20.8歳(2021,Worldometer)という若さに満ちた国。教育や医療に多くの課題があり、青少年の人生は家庭や社会環境に大きく左右されている。特に、若者の雇用不足が深刻な問題で、暇を持て余してギャングに入ったり、お酒に溺れたりして非行に走る若者(At risk youth)が少なくないが、それをサポートする社会的セーフティーは限られている。

NGO Ba Futuru (現地語で「For the future」)

平和構築を目的として設立されたローカルNGO。

2012～13年に、At risk youthsを対象とした平和啓発プロジェクトを実施。参加者は、英語や平和教育などの基礎教育と、絵画、写真、演劇、音楽などの表現活動を組み合わせた半年間のプログラムを受け、プログラムの最後に自分たちの作品を通して平和へのメッセージを伝えるPeace Festivalを自分自身のコミュニティで開催した。

資料11

初は自分たちの写真を友達と決めポーズをしながら撮り続けるのですが、回数を重ねるにつれて自分の生活や周りの様子、社会が抱えている問題に目を向けるようになりました。毎回写真を撮りに行く時間の後に撮影してきた写真をスライドショーで見ながら皆で講評する時間を持っていたのですが、自分が撮影した写真についてどんどん話をするようになっていきました。そのときに変わってきたことを感じつつ見ていたのですが、様々な課題を抱えている順風満帆ではない状況で育ってきた彼らが、自分の言葉で伝え、それを大人が受け止めるという機会が当たり前にはなかったかもしれないと思いました。

これは授業の最後に、コミュニティでの自分たちの取組みの発表の場面です。自分たちのこれからの取組みを自分たちで決めていき、舞台を設営しPeace Festivalのキャラバン的な発表活動をしていくことになりました。そのコミュニティにおいて、彼らはやんちゃな若者で問題を起こすタイプ、という見られ方をしていた節があるのですが、それらの舞台を自分たちのコミュニティに見せることで彼らを見るコミュニティと彼ら自身の両方にとっても大きな変化がありました。平



資料12

和へのメッセージ、コミュニティを改善したいというメッセージを発信するフェスティバルだったので、そのインパクトはとても大きかったのではないかと感じました。

これは彼らが作ったメッセージ写真の作品です「資料12」。

彼らの人生経験や、コミュニティが抱えている様々な社会的問題に対して、彼ら自身の立場で写真を撮ってメッセージをコミュニティに発信しています。造形の可能性とは、表現することの喜びであり、彼らの姿を見ていて自分の想いを伝えること、それを受け取る誰かがいること、そこに生まれる共感と信頼（理解し、理解されることの喜び）であると思います「資料13」。表現する喜びに触れた経験が日々の暮らしを楽しむしたり、何気ないこと・ものへの興味関心を生んだり、伝える勇氣になったり、何かを創り上げる喜びであったり、人生を先に進めるための支えになり得ることに繋がっていくと思います。

その中ですごく面白いなと感じたのは、内発的な変化は実に時間がかかるものである、という認識をしていた中で、この半年間という短い期間のプログラムで彼らが大きく変化していったことです。なぜかと考えた時に、アートベースとい

造形の可能性 = 表現することの喜び

- 自分の想いを伝えること、それを受け取る誰かがいること、そこに生まれる共感と信頼（理解し、理解されることの喜び）
- 自分自身の手で何かをつくりあげたという充足感と自信
- 表現する喜びに触れた経験が、日々の暮らしを楽しくしたり、何気ないこと・ものへの興味関心を生んだり、伝える勇気になったり、人生を先に進めるための支えになりうる

資料13

う行為が自分の内面に向き合う行為のため、変化を起こしやすい有効なアプローチではないかと思っています。仮に外発的なきっかけを受けたとしても、内発的な活動をせざるを得ないような取組みになっていくので、変化を起こしやすいという点ではアートは可能性を秘めていることを感じます。以上になります。

石賀 ありがとうございます。本当に良いお話を聞かせていただきました。続いて神谷さんの造形のポテンシャルについてのお話です。

神谷 先ほど渡部さんのお話が大変興味深かったのですが、そこで出されたのは芸術や造形が持つ力として繋げる力であるということだったかと思っています。この繋げるという言葉が自分にとってもキーワードになります。この画像はコロナ禍において私たちのプロジェクトで造形活動の場面になります【資料14】。造形は、子ども中心の遊びとか遊びから学ぶということへの親和性が高く、人々の中にスツと入っている概念であると思っています。また、保育の実践の上でも環境作りが重要になってきますが、その際に、造形の力で素敵な環境を創っていくということが可能になると思います。それも造形の可能性であると感じます。



資料14

あともう一つお話ししたいのは、人の心というのは、やはり魅力がないと関心を持つてもらえないということがあるかと思っています。例えばそれはコミュニケーション能力ということもありますが、その一つとして、造形という手段を使って人の心の関心を引きつける、そのような造形の持つ魅力や繋げる力を活用して、事業の中に造形的発想であるとか、具体的な形を創るということが必要であると思っています
 【資料15】。以上です。

石賀 ありがとうございます。それでは藤掛さん、よろしいでしょうか。本日のパネリストの中では、唯一造形に関してはご専門外というお立場ではございますが、よろしくお願いいたします。

藤掛 本当に造形のごことは専門外にはなるのですが、南米のブラジルとパラグアイのことについてお話しさせていただきます。一枚目の画像は、私の実践ではありませんがスラム街を明るくしようという取組みで、町中に虹色にペンキが塗られています。とても衝撃的で素晴らしいなと感じました。私は毎年パラグアイに学生を連れて渡航していたのですが、36時間かかるのでどこかを經由しなければならぬということもあり、ボリビアやブラジル等に立ち寄る機会がありました。



資料15

それが下の2枚と右上の私が撮影した写真になります。

このようなカラフルなものやペイントしてあるものは、壁に作家さんがまだ売れていない方が作品を描きそこに自分の名前やメールアドレスなんかを入れて、この絵を気に入ったら連絡して下さいとか書いてあったりします。このようなアピールの仕方に可能性を感じました。

次のスライドは、パラグアイのスラムでの活動ですが、スラムの方達がゴミを拾ってきてミカン箱のようなものをカラフルに塗って壁に設置して、そこにきれいなお花を置いたり、ペットボトルを切って花瓶のように飾ってあったりして、今やこのスラムは観光地になっています。そして、海外の方々がここを見に来るのです。ゴミであつたものを再生して町を活性化させるアートですよ。今日は時間が限られているのでまた機会があったらお話ししたいのですが、ゴミから楽器を作って楽団をやっている人たちもいるのです。本当にこの造形というか、アー

トって素晴らしいなって思い、私もNGOで活動させていただきました。

次のスライドになるのですが、スラムの学校で活動していても様々な家庭の状況の中で学校に来ることができないか、学校にきてても活躍できる場面が見いだせない子どもたちに対して、壁に絵を描こうという取組みをしてみました。初めは私や私のゼミ生やNGOスタッフで描き始めたところ、子どもたちが押し寄せてきて、日常授業に参加できないような子どもも、やりたい！ やりたい！ というように喧嘩が始まりそうになるくらいでした。このような造形的な協働的な活動はすごく良いなと感じました。私は元々家政学が専門の隊員で、家庭科教員の免許のある人類学者ですので、共に食べる共に作って食べる共食が信頼を作ると学生達にも伝えています。アートの同じではないかとすごく思います。村の学校でも壁にペンキを塗ったりとかしつつ、一緒に活動することでメモリアルパークのようになるような活動を心がけています。

前半に撤退することも大事で勇気ある行動の一つである、というお話があつたかと思いますが、私も村で学校を作ろうとしていく活動の中で、一校撤退したことがありました。その時に泣いている学生もいたのですが、撤退するということはお互いが傷つきます。とても痛みを伴う経験であつたと思います。その後に文化交流のパフォーマンスとして、日本のソーラン節を発表したのですが、村の子どもたちがすごく乗ってきました。学校を作れないとなつたのですが、村や子どもたちのために一生懸命活動をするためにやってきた日本の学生達の思いを受け止めてくれたのではないかと思います。学校建設に関しては、もしかしたら今無理をしたら成功するかもしれません。しかし、村長さんの意見や村の方達の意見や状況の中で、無理矢理学校建設を進めることはできませんでした。本当に学生にとっても辛かったと思います。でも、撤退した後こうしてソーラン節を踊った時に村の子どもたちが一緒に踊ってくれたのを見ると、やはり繋ぐ力があるというか、絵とかダンスとかのパフォーマンスのアートというのは、計り知れない力があるなと強く感じます。自分の国際協力の中でアートや造形を取り入れているの

で、是非先生方や参加いただいている学生の方々やご視聴いただいている方々にも参考にしていただければと思います。

石賀 ありがとうございます。美術を専門にしている我々ではなく、専門外の方からこのようなお話を伺えて本当に嬉しい気持ちでいっぱいです。さて時間も迫ってまいりました。最後になりますが、渡部さんのお話や国際協力現場の実態や分析の中で、パネリストの皆様は造形のポテンシャルについて一言、お手元のホワイトボードに書いていただければと思います。

それでは、山田さんからお願います。

山田 はい、「生活文化の国際交流 アートは触媒」と書かせていただきました。

私は第一部の渡部さんのお話に共感をするのですが、アートというのは特別なものではなくて、何気ない日常生活の中にある生活文化であると捉えています。美術館にあるような作品だけがアートではなく、我々の日常の草の根の生活の中にもあるのだという認識の上に立つて、草の根レベルで国際交流をすると、政治や経済で語ると紛争になりがちなところを、庶民同士で生活文化を共有できたら、言語や文化背景等を超えて、「そうだね、わかるわかる」といった人類としての本質的な共感が得られやすいのではと考えます。

自分の家族や子どもや大切な人に幸せになつて欲しいということは、人類に共通の願いであると思います。そういうことを世界中で、庶民レベルでお互いにコミュニケーションできるシステムを創っていければ、国際社会の異文化間理解への橋渡しになるかと思えます。生活文化の国際交流です。

その際に、アートという触媒が間に入ることで、AやBという国の異文化間を繋げる化学反応が起きる可能性が

高まるのでは、ということをお話のパンリストの方々のお話を伺い、益々その思いを強く致しました。ありがとうございます。

石賀 ありがとうございます。それでは神谷さん、よろしくお願いいたします。

神谷 私が今回のシンポジウムでお伝えしたかったのは、「傾聴力と語る力」になります。これを日本人の場合しつかり持っているとは思いますが、傾聴し言葉で伝えていく力を日本のアートを担っていく人たちで、日本の力として世界にどんどん発信したり実践したりし伝えていっていると思いますが、この点が重要だと思います。

学生さん達は、今作品を作ったり様々な場面で実践をしたりとかあると思いますが、先ほど私が冒頭にお話させていたように、色々な物を俯瞰して見ていただきたいと思っています。例えば表現活動をしなから、世界の人口問題がどうなっているのだろうか、そのような視点を持つことで自分のアートとしての表現が変わっていくこともあるのではと思っています。

第一部で渡部さんから、「さあ旅に出よう」というお話がありました。その前の旅に出る時にそれぞれの行く先々の文化とかをしつかりと認識して旅に出てもらいたいと思います。あともう一つ、第一部で学生さんから、「○したら、旅に出たいと思います」というコメントもあつてもちろんそうだとは思いますが、一方で「たら」という前に「今、いつちゃえ！」と思うところもあります。若いうちにしかできないことがあるので、どんどん挑戦してもらいたい、前提をつけないで挑戦してもらいたいということを最後にお伝えしたいと思います。以上になります。

石賀 ありがとうございます。それでは矢加部さん、よろしいでしょうか。

矢加部 「共感して広がる」と書かせていただきました。今日は世界様々な地域でのお話を伺うなかで、共感するところがすごく多く、それぞれの立場で見えてきたもの、経験してきたもの、アートであったり、アートでなかったりする様々なお話の中で、共感するポイントが数多くあったと感じます。恐らく参加者の皆さんが感じられてきていることかと思いますが、共感するところから何かが広がっていくために、その第一歩として共感する場があるということが大切であると思います。今回とても良い機会を頂いて感謝します。以上になります。

石賀 ありがとうございます。笑顔でお話していただいて本当に嬉しいです。最後に藤掛さん、どんな言葉を書いていただいたでしょうか。

藤掛 はい、他の皆様と重なるところがあるかと思いますが、最後に感じたことは同じかなと思いました。「対話を生み出す力Ⅱアート」と書かせていただきました。私は料理等もアートであると思っているし、村の生活もやはりアートだと思います。村人達は、牛一頭の命を頂くことで、その皮を革として使い、内臓は干してチーズの材料にしたりしながら、本当に日常全てをきれいに生きていらつしやる。そういったアートって、その日常を写真で切り取るのも、絵に描くのもアートであるし、創り出すことも、ペンキを塗るのも、何も無いところから色を作っていくこともアートであって、その中で対話…ダイアログ、もしかしたら言葉を交わさない対話とでも言いましかうか、その中で互いが理解し合っていく中で、互恵というものが生まれていくのかと思います。

最後に、対話を生み出す力がアートであると言うことで私のまとめとさせていただきます。ありがとうございます。

石賀 世界中様々な思惑や資本経済原理等あると思うのですが、その中で人種や文化、あらゆる差別を越えて、やはり世界は美しいと感じたいものです。先ほど本質的なところで繋がるというお話がありました、そこにアートの大きな可能性はあるのではないかと改めて思いました。

神谷さん、実は昨年造形大を卒業されて来年4月からフィリピンに行かれる方が今日、この会場にお越しただいています。造形大から何人もこれから世界に向かって羽ばたこうと思っている人がいます。その他今日のこのシンポジウムに参加され、視聴されて、私もやってみようと思った方もきつといらっしゃるかと思いますので、これから楽しみにして下さい。

皆様、コロナが収まりましたら渡部さんがおっしゃたように旅に出ましょう。旅を通して精神的な部分も含め、あらゆるものを見てあらゆることを感じ、そして、私たちに何ができるかということを書いていきましょう。本シンポジウムがそのような機会になってくれれば嬉しく思います。一刻も早く緊急事態宣言が明け、コロナの収束を願うばかりです。それまで次のステップに向けて皆さんと共に学んでいけたらと思います。本学教職課程といえども、このようなシンポジウムをまた企画したいと思しますので、今後ともよろしく願いたいと思います。

神谷さん、矢加部さん、活動中の国からご参加いただきありがとうございました。藤掛さん、ありがとうございます。お疲れ様でございました。これをもちまして本シンポジウムを終了とさせていただきます。ご参加、ご視聴ありがとうございます。



表現を利己的な視点だけ
でなく 俯瞰的に見て！
前提はすなわち 批判を！

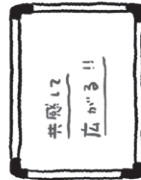
環境づくりといふ
造形活動



保育.....

魅力 かないと
人は重ならない!

問12を忘れたら
ズバリは入る



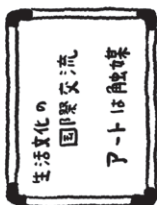
大蛇!!



Hand-drawn diagram showing a person sitting at a desk with a computer monitor. An arrow points from the person to a cloud of shapes above the monitor, and another arrow points from the person to a cloud of shapes below the monitor.



- ・ 作品を見る
自由な作品に「見る」は必要
するようにな!
- ・ 相互理解を深めるきかけ
- ・ 外発的きかけでも
- ・ 表現はどこかしら「所発的



共感！
度きさん！

草の根の生活の中にあり

[illegible]

藤掛洋子 著



山田 昌彦



價值觀

本質的なところから
アートの力
旅 → 精神のな



東京造形大学 教授
石加真直之先生

WIT-2-9-

生活 / 日常を
どう捉え直すか
+ 糧倉的 ！！



街がキャンパスだ……!

フアベ-ヲ
favela
ジニハ、ア-トニ
(254)

1-3
⇔
共通点
食 共 17年 食

対話を生み出す
力 = アート!!

料理も村の生活もアト！
アト＝言葉と交わらない対話行為
といふ 今後は自分の教育活動に相応しい

東京造形大学研究報 別冊 19

シンポジウム2021 教育がつなぐ「国際協力×ZOKKEIのポテンシャル」

発行日 二〇二三年三月三十一日 第一刷

編者 石賀直之・小林貴史・山田猛

グラフィックレコーディング 谷川潤

写真撮影 松下綾子

発行 東京造形大学

1920992 東京都八王子市宇津貫町 1556 Tel. 042-637-8111 Fax 042-637-8110

URL <http://www.zokei.ac.jp>

制作・印刷・製本／隼風人社